【翻訳】E．F．C．ボイエセン著『デンマーク語小文法』（第3刷、1848年）

キルケゴールの時代（デンマーク黄金時代）におけるデンマーク語文法

平　林　　孝　裕

解題にかえて

19世紀のデンマーク黄金時代に関心をいだく読者、とりわけキルケゴールやアンデルセンについて深く知りたいと考える読者であれば、可能であるならば原典で、すなわちデンマーク語のテキストで読みたいと願うだろう。しかしながら、そのような読者を悩ますのは、まずは現代のデンマーク語の辞書に探索する単語がしばしば見いだせないこと、また、活用をもつ語の変化形が辞書の記載と必ずしも一致しないことである。

たいていの場合、そのような障害の理由は正書法の歴史的変遷[1]に起因するものである。当時のデンマーク語のテキストに親しんで、ある原則を見出すことから始め

1　もっとも大きな変更は1948年の正書法の変更である。この改革で1、2、3に改められた。1948年の正書法改革については、デンマーク国語審議会（Dansk Sprognævn）のホームページ所載の「正書法辞典の歴史的変遷についての概観」（https://dsn.dk/retskrivning/rohist-retskrivningsordboger-gennem-historien/hurtigt-overblik-over-retskrivningsordboger-gennem-tiden）を参照。

1．名詞は小文字で書かれる。
　　Hus ⇒ hus ／ med Hensyn til ⇒ med hensyn til ／ m. H. t. ⇒ m. h. t.

2．文字å（aaを記すために）が導入される。
　　laane ⇒ låne

3．〔助動詞の不定形で〕kunne、skulle、villeの過去形にあるサイレントのdは除去される〔直前の母音が短いことを示すため、直後の子音字は重複されることになる〕。
　　Kunde man se den i Aftes? ⇒ kunne〔Kunne man se den i aftes? 昨晩それを見ることができましたか〕
　　Han skulde tidligt hjem i Gaar. ⇒ skulle〔Han skulle tidligt hjem i går. 昨日、かれは早めに家を出るべきであった〕
　　I Fjor vilde hun ogsaa med. ⇒ ville〔I fjor ville hun også med. 昨年、彼女もいっしょに行くことを望んでいた。〕

なければならない。そのような原則を習得し、辞書に見出し語を見出すまでそれほど時間はかからない、と体験的に云えるかもしれない[2]。そのような経験則によらず、さらに立ちいって語彙の問題に向かい合うならば、語彙の歴史的な綴字や意味の変遷を考慮し、綴字などの歴史的変遷をも採録しているデンマーク語辞典[3]を利用することがまず勧められる。あわせて19世紀当時、実際に用いられた（もしくはその時代の語彙を収めた）辞書[4]を参照することも必要となる。そのような辞書が手元にあったとしても、ありとあらゆる語形を網羅した用例が辞書に収録されているわけでないので、語形変化についてルールを記載した手引き、（このような形態論だけでなく統語論もふくめた）文法書が必要となる。語句の意味さえわかれば、語形変化の歴史的変遷など些細なことだというのでなければ、とりわけ厳密な解釈を追求する研究においては確かな手引きをもってテキストに臨むことが必須である[5]。

このような理由から手引きとなる19世紀黄金時代のデンマーク語文法が求められる。やや古いが、たとえばヤコブ・バーデン（Jakob Baden）の詳細な文法書[6]を翻

2　なお、キルケゴールについては、彼が使用した略号とともに、J．ワトキンによる詳細な対照表が作成されている。Julia Watkin, *A Key to Kierkegaard's Abbreviations and Spelling* : *Nøgle til Kierkegaards forkortelser og stavemåde*, København: C. A. Reitzels Boghandel, 1981.

3　*Ordbog over det danske Sprog*, 28 bind, udgivet af Det Danske Sprog- og Litteraturselskab. 1918-1956.があげられる。デジタル版が以下で利用可能である。https://ordnet.dk/ods（最終確認2021年1月7日）　本辞典は1700年から1950年までデンマーク語の歴史的変遷をカバーしている。

4　Christian Molbech, *Dansk Ordbog indeholdende det danske sprogs Stammeord, tilligemed afledede og sammensatte Ord, efter den nuværende Sprogbrug forklarede i deres forskiellige Betydninger, og ved Talemaader og Exempler oplyste*, 2 Bind, Gyldendalsk Boghandlings Forlag, 1833. 及びその第二版（Anden, forøgede og forbedrede Udgave, 1859）が、周知のようにまず挙げられる。

5　文法の知識が読解に重要な意味をもつ周知の例をあげよう。1851年から翌年にかけて書かれた*Dømmer selv!*というキルケゴールの著作（刊行は兄ベーター・クリスチャンによって1876年）がある。英訳のタイトルでは *Judge for Yourself!* となっている。タイトルの語形“dømmer”はたとえば現代デンマーク語での直説法・現在・単複同形でなく、当時のデンマーク語での命令法・現在・複数形である（本翻訳の§28を見よ。以上の説明は多くを桝形公也訳「汝ら自ら審け！」[『キルケゴール著作全集』第13巻、創言社、1988年]所収の「訳注」（307頁）、「解説」（324-325頁）に負うている）。「あなた方は…せよ！」と命じられることは重要である。誰か「一人」にという以上に複数の「聴衆」を前に語られる勧告として解すれば、デンマーク教会に連なる会衆への目覚めの訴え、教会闘争につながるキルケゴールの思いが読みとれるだろう。

6　Jacob Baden. *Forelæsninger over det danske Sprog, eller resonneret dansk Grammatik*. Kbh, 1785. 2. udg., 1792; 3. udg., 1801/1804; 4. udg. (uændret optr.), 1812/1813.

訳することが考えられる。けれども、デンマーク語史を文法の観点から評価して、私たちの意図に最適な一書を選ぶことは筆者のよくするところではない。ましてや、そのような評価が困難だからという理由から自分の手で文法を概観することなど望むことはできない。そこで、まったく実際的な理由によって、当時の文法書の中からボイエセンの『デンマーク語小文法』(*Kortfattet dansk Sproglære*) を選ぶこととした。その理由は以下のとおりである。

1. 本書『デンマーク語小文法』は、キルケゴールの死後にのこされた『蔵書目録』に含まれている。
2. 著者ボイエセンは、キルケゴールのラテン語学校時代の教師であり、学問的にも信頼できる研究者であった。
3. 本書は刊行以来、多数の増刷を重ねており、正書法がその間に複数回変更されたにもかかわらず長い期間用いられた。
4. 電子情報として本文が容易に参照可能である。つまり、拙訳を手掛かりにデンマーク語本文を参照することができる。

本書は小冊子であるので、全体を一通り学びやすいということも重要な判断基準となった。国定や公認されたものではないが、後述するように信頼のおける言語学者、教師があらわした本書、そしてその翻訳は、19世紀におけるデンマーク語の初学者に有用な手引きとなりえるだろう。

著者ボイエセンを紹介し、あわせてキルケゴールとの関係についてふれておきたい[7]。エルンスト・フレゼリク・クリスチャン・ボイエセン（Ernst Frederik Christian Bojesen）は、1803年3月21日にコペンハーゲンに生まれた。1820年にラテン語学校ボーアヂュズスコールの生徒となっている。当時、校長を務めていたミカエル・ニールセンはこの生徒を高く評価し、1821年にすでにボイエセンは母校で古典語の講義を担当し始めている。まもなく教頭（Inspektør）となり、1840年にソーロェオ・アカ

7 *Dansk Biografisk Leksikon*, 3. udgave (1979-84) med Svend Cedergreen Bech som redaktør. 所収の記事(skrevet af Hans Ræder) による(http://biografiskleksikon.lex.dk/E.F.C.Bojesen、最終閲覧2021年1月7日)。ボイエセンの肖像についてはデンマーク王立図書館デジタル・コレクションを参照(http://www5.kb.dk/images/billed/2010/okt/billeder/object446460/da/)。キルケゴールとの関係については、Peter Tudvad, *Kierkegaards København*, København: Politiken, 2004. Per Krarup, *Søren Kierkegaard og Borgerdydskolen*, København: Gyldendal, 1977, s. 32-33; s. 62-64.

デミーにギリシャ語の講師として転出するまで、ニールセン校長の「右腕」[8]として活躍した。その間、1824年に神学教育課程（teologisk eksamen）を修了している。これと並行してクーラウ（Friedrich Kuhlau）[9]の指導の下で音楽を学んだ。1833年に*De harmonica scientia Graecorum, Pars I*（「古代ギリシャの和声学について、第一部」）でマギスター学位を、さらに1836年に*De problematis Aristotelis*（「アリストテレスの『問題集』について」）で博士学位を取得した。両書はボイエセンの二つの関心、古典文献学と音楽への関心が結実したものとみなすことができる。アリストテレス研究は、ボイエセンをポウル・マーチン・メェラーとＪ・マズヴィに結び付けた。1847年にアカデミーの専任となり、1849年のアカデミー解体後も長く、のこされた関連の学校・教育施設での責任をになった。1863年に健康を害したため職を辞し、ロスキレでの新生活に臨んだが翌年に逝去した。ボエイセンは有能な文献学者であったけれども、校務に忙しく自分の研究に十分な時間を割くことが許されなかった。しかし徹底性と明晰さにおいてその業績は傑出しており、1847年に学術協会（Videnskabelig Selskab）の一員にも選ばれている。生涯にわたって熱心な教師であり、すぐれた文献学者であった彼が教科書として著した一冊が『デンマーク語小文法』（1845年）である。

キルケゴールは、このボイエセンが教鞭をとっている時代にボーアヂュズスコール学校で学んでいる。5歳（1818年）となったキルケゴールは兄ペーター・クリスチャン同様に本校の生徒となった（また1837/38年に彼自身も教壇に立っている）。ラテン語学校でもっとも重要な教科は当然ながらラテン語及びギリシャ語であり、ボイエセンはこの教科の主任者であった[10]。キルケゴールはみずからの著作及び日誌遺稿を通して、ボイエセンに言及することはない[11]。しかし当時、すでにボーア

8　Holger Lund, *Borgerdydsskolen i København 1787-1887: Et Mindeskrift i Anledning af Skolens Hundredaarsfest*, Kjøbenhavn: Otto B. Wroblewskys Forlag, 1887, s. 229. 本書で教師としてのボイエセンは「若者たちへの愛情をもった教師」(Skolemand med Kjærlighed til Ungdommen)と評されている（ibid.）。

9　フリードリヒ・クーラウ（1786-1832）ドイツ生まれの作曲家、1810年のナポレオンのドイツ侵攻時にデンマークに亡命し、コペンハーゲンで宮廷室内音楽家となった。朝山奈津子執筆「クーラウ」『ピティナ［全日本ピアノ指導者協会］・ピアノ曲事典』（https://enc.piano.or.jp/persons/65］を参照／最終閲覧2021年1月7日）。

10　Peter Tudvad, *Kierkegaards København*, København: Politiken, 2004, s. 171.

11　「キルケゴール全集オンライン・データベース」の人名索引（https://www.sks.dk/reg/pers_B.asp）による。キルケゴールがボイエセンの名に言及するのは後述の事情で送られた「ボイエセン宛［日付不詳1841年9月］書簡」（*SKS* 28, 265）を除けば、「ペーター・クリスチャン宛

ヂュズスコール学校を去っていた教師に、郵送でマギスター論文である『アイロニーの概念　たえずソクラテスを顧みつつ』を献呈していることを考慮すれば、二人の親密さは推し量ることができる[12]。キルケゴールの『蔵書目録』には『デンマーク語小文法』の第三刷（1848年）を含む4冊のボイエセンの著作が認められる[13]。キルケゴールは文法書についていえば主要蔵書に、古典語について、５巻（６冊）のラテン語文法、１巻のギリシャ語文法と１巻のヘブル語文法の書籍を所有していたことが知られる。デンマーク語文法については、「補遺Ⅱ」に複数の文法書がみられるが、主要蔵書にはボイエセンの著作のみであった[14]。著作でキルケゴールが「文

［1829年5月8日付］書簡」（*SKS* 28, 10）のみである。

12　キルケゴールからの献本に添えられた手紙は以下の通りである。「拝啓、ボイエセン教授！／読んでください、何よりしかし、貴方が一緒に届けられた本に飽き飽きしないでほしいと思います。この大部の本が今手にしている手紙との関係において、付帯する義務的なもの（Servitut）と思わないでください。この一筆と本との関係はそれぞれ独立しているのとかわらないからです。手紙に添えられているのが本であって、手紙が本に添えられているのではありません。手紙は旬があるもので［小さくても］主要な関心事であり、本は貨物か何か、ほとんど食料品（Fødevare）、たいしたことのない日常使いの品物（Fedevare）です。すなわち何の強制も、「勉強しろ」（ニールセン教授）との指示もありません。どこから見ても無料配布サンプルでしかないものとしてお受け取りください。ご厚意とご関心をもって機会がありましたら私の苦労のあとをきっと理解してくださると思いますが、それに対し私の感謝のささやかな表現であるこの一筆を添えています。／返信は不要です。おそらく貴方はいまも、ボーアヂュズスコール時代のように、毎日何度も言っていると思いますが、その言葉を私がいま言いましょう。「もうけっこうです」と。私の意図は、貴方を「さあ続けて」と言われて答える「次の人」にすることではありません。／敬具　親愛なるS・キルケゴール」

13　*Auktionsprotokol over Søren Kierkegaards Bogsamling*, Udgivet af H. P. Rohde. København: Det Kongelige Bibliotek, 1967（以下、略号*Ktl.*で分類番号を示す）.キルケゴールが所蔵したボイエセンの著作は以下の通りである。

Ktl. 1031　*Kortfattet dansk Sproglære*. 3. Opl[ag]. Kbhvn. 1848.

Ktl. 1039　*Haandbog i de romerske Antiqviteter*. Kbhvn. 1839.

Ktl. 1078　*De Problematis Aristotelis*. Havniæ 1836.

Ktl. 1090　*Aristoteles's Statslære* af Dr. E. Bojesen. Kbhvn. 1852.

14　ラテン語文法は*Ktl* 996; 998; 1006-07; 1009; 1010. なお、*Ktl.* A I 144にも。ギリシャ語文法は*Ktl.* 992、ヘブル語文法は*Ktl.* 989。デンマーク語文法は*Ktl.* A II. 16 に*Dansk Grammatikker og Læsebøger* af [D. S.] Birch, [Jens] Høysgaard, [C. Ph.] Funke, [N. L.] Nissen, [Fr. Høegh-] Guldberg, m.fl. が含まれる。当該のタイトルにあたる書籍は存在しない。おそらく複数の書籍を一まとめにしたものと考えられる。王立図書館蔵書（https://soeg.kb.dk/）から当時の文法書を探索した結果、次の書籍が浮かび上がった。

1）Fr. Sneedorff Birch. *Grundrids af den danske Sproglære*. Aarhuus: S. Warberg, 1833（https://books.google.co.jp/books?id=4zhVAAAAcAAJで閲覧可能、2021年1月7日）

2）J. T. R. Høysgaard. *Første Anhang til den Accenturede Grammatika, angaaende Indretningen i et orthografisk Ord-Register, hvoraf en Prøve følger bag efter*. Kbh, 1769

3）C. P. Funke's *Almindelige Lærebog for Borgerskoler, eller Underviisning i de for hver*

法」（Grammatik）等に言及する場合、『あれかーこれか』（1843年）でラテン語文法に言及するほか[15]、「一つの言語には、文法書に範例として挙げられる一つの動詞よりもたくさんの範例的に活用する動詞がある」[16]と、また、タイトルともなった「enten-eller」という接続詞につき、「この語は、文法学者が思い込んでいるのとは違って、離接的接続詞（disjunktive Conjunktioner）ではない、否、二つの語は分かちがたく結びついており、それゆえ一語として書かれて当然である」[17]とある。また、『人生行路の諸段階』（1845年）に「主語と述語だけからなる文を作文することは、副文と挿入文がともなった［文尾に至って初めて文意が完成する］掉尾文を作るよりも容易である」という表現がみられる[18]。これらに文法をめぐるキルケゴールの関心を垣間見ることができる。いずれもキルケゴール所蔵の『デンマーク語小文法』の刊行年（1848年）以前の記述であるので、ボイエセンの文法的な説明が背景となっていると考えることはできないが、たほう1845年に初版が刊行されたボイエセンの文法はキルケゴールが著作活動をまさに展開した同時代に書かれた文法書であり、翻訳されるテキストとして十分に意義があるものと判断される。

本翻訳の底本であるが、キルケゴール自身が所蔵した第3刷（3. Oplag, 1848）と

---

tænkende og virksom Borger nødvendigste Videnskaber og Færdigheder. Kbh: 1797-1805（第二巻に2. Dansk Sproglære［1798］が含まれる）。

4）N. Lang Nissen. *Grundtræk af dansk Sproglære, med en Forberedelse til samme for de første Begyndere*. Kbh: Schultz, 1808（https://books.google.co.jp/books?id=ijtVAAAAcAAJで閲覧可能、2021年1月7日）

5）Frederik Høegh-Guldberg. *Grundlag ved grammaticalske Forelæsninger for Ungdommen*. Kbh, 1814

「m.fl.」（ほか多数の著者）となっているので、上記以外の文法書を所蔵していたことがうかがわれる。ビアク（Birch）の文法が最新であるが、比較的古い時期（少なくともキルケゴールが著作活動を継続した時期以前）のものである。キルケゴール及び同時代が「学んだ」という観点でなく、キルケゴール時代に実際に使用されていたデンマーク語文法を求める観点からボイエセン『デンマーク語小文法』の翻訳には意味があると考える。

15　*SKS* 3, 256.（同じ個所にラテン語とはないがGrammatikが見出される）

16　*SKS* 3, 249.

17　*SKS* 3, 157.

18　*SKS* 6, 276. ほかに*SKS* 8, 65 [Grammatikerne]; *SKS* 14, 19 [Grammatikens]; *SKS* 14, 137 [Grammatik]が用例として見られる。未刊行著作の「ヨハンネス・クリマクス」に古典語文法について、日誌遺稿では1846年の記述にラテン語文法について、1852年の記述に「死語の文法を書くこと」を例にとった言及がある（www.sks.dkによる、2021年1月7日）。

する[19]。1845年に刊行されたのち、この文法書はたびたび増刷され、デンマーク王立図書館のデータベース[20]で確認できる限りであるが、1864年のボイエセンの没後となる1885年までに20刷を数えた。1885年以降も増刷が継続されたようで1897年の22刷も確認できる[21]。「刷」（Oplag）とされて「版」（udgave）とされていない。そ

19　本書はデンマーク王国・王立図書館にて2013年にデジタル化されて公開されている（http://www5.kb.dk/e-mat/dod/130020702444.pdf／最終閲覧2021年1月7日）。王立図書館利用者規定§6により、電磁的資料については著作権保護外にある資料については自由な利用が認められている（https://www.kb.dk/services/laan-og-aflevering/brugerreglement-det-kgl-bibliotek／最終閲覧2021年1月7日）。

20　https://soeg.kb.dk/にて検索（最終閲覧2021年1月7日）

21　Googlebooksで　第11版（Ellevte [11.] Oplag, Kjøbenhavn: C. A. Reitzels Forlag, 1863）が公開されている［本データで一部（s. 8-9）が欠落している］。また本書は、*Kortfattet Dansk Sproglære med den ny befalede Retskrivning*（To og tyvende [22.] Oplag, København: Gyldendalske Boghandels Forlag, 1897）としてInternet Archiveにて公開されている（https://archive.org/details/kortfattetdansks00boje［最終閲覧2021年1月7日］：原所蔵機関はUniversity of Illinois Urbana-Champaignである）。両者の違いは第11版がゴシック書体で、第22版がローマン書体で印刷されるほか、正書法の変更を除くと驚くほど違いがない（ページ付も含めて）。第22版のタイトルには「改定された正書法による」と付記があるが、第11刷と第22版の間に行われた正書法の主要な変更は、Sven Grundtvigの正書法（1872年）及びSaabyの正書法（1891年）である（https://dsn.dk/retskrivning/rohist-retskrivningsordboger-gennem-historien/hurtigt-overblik-over-retskrivningsordboger-gennem-tiden）。

Sven Grundtvigは、新しい正書法を『デンマーク語小辞典』（1872年）で提案した。グロントヴィが提唱した正書法の原則は以下の通りである（*Dansk Haandordbog med den Kultusministeriet anbefalede Retskrivning*, udarbejdet af Sven Grundtvig, Kjöbenhavn: C. A. Reitzels Forlag, 1872, s. VII-VIII. ／ https://books.google.co.jp/books?id=9ukxAQAAMAAJ［最終閲覧2021年1月7日］）。

1．ラテン語書体〔ローマン体〕が、いわゆるデンマーク語書体〔ゴシック体〕に替えて実用上できる限り速やかに導入されること。
2．子音〔字〕の重複は、他の子音〔字〕の前で除かれれる。その結果、sikre、tapre、ytre〔それぞれsikkre＜sikker、tappre＜tapper、yttreが旧表記〕と記すことになる。
3．母音〔字〕の重複は除かれる（つまり、Hus、Is、Sten〔それぞれHuus、Iis、Steenが旧表記の例〕となる）。しかし、混同をおそれる場合、強勢符号で代替する（すなわち、ved、visと区別するために、véd、vísとする〔動詞videの直説法・現在・単数形veedと前置詞ved、名詞viisと形容詞visを区別するため〕）。
4．無音のeは除かれる。しかし、混同をおそれる場合、強勢符号で代替する（すなわちfor、varと区別するために、fór、várとし、saaと区別するために、saá、saãとする〔動詞fareの直説法・過去形・単数foerと前置詞for、形容詞vaerと動詞væreの直説法・過去形・単数var、動詞seの直説法・過去形saaeと接続詞saaを区別するため〕）。いわゆるデンマーク語書体を維持する場合、とくに*veed*、*viis*、*foer*、*vaer*、*saae*を使用してよい。
5．skに先行するd、及びnとsとに挟まれたdは、dの由来がその言葉のもともとの領域になければ、除かれる（つまり）kysk〔kydsk：以下、カッコ内旧表記〕、Kusk〔Kudsk〕、

の理由は当時の慣行にしたがって増刷に際して大幅に書き換えるということをしなかったからだと推測される。たとえば、第11刷と第22刷では、その間に書体もふくめた正書法変更の提案があったにもかかわらず、正書法に準拠した書き換えはなされているものの、一部の用例のほかに頁付もふくめて大きな変更は見られない。第3刷の場合も、おおむねその傾向はみられる。しかしながら、第11版及び第22版と比較すると第３刷からの若干の説明の変更・付記等がみられる。おそらく刊行後、間もないせいもあるのだろう、文法事項の説明で不十分な個所、用例が適当でない個所について印刷を増し刷りする機会に改訂をしたのだと思われる。すべての刷を比較したわけでないので、いずれの刷から第11版及び第22版にみられる本文となったかについて明らかでないが、そのような事情を鑑みて、のちの刷の本文から理解に資する説明の変更や付記について注で示すこととしたい[22]。

本翻訳が、キルケゴール（もしくはアンデルセン）にとどまらず、19世紀デンマーク文化の精華にふれるための一助となればと願う。

Glans〔Glands〕、Prins〔Prinds〕、〔以下、dが残される場合〕bidsk〔＜bide〕、hadsk〔＜hade〕。islandsk〔＜island〕。

6. 文字qはデンマーク語の単語ではkに置き換える（Kvinde、Kvas、Kvæg〔旧表記でそれぞれQvinde、Qvas、Qvæg〕）。
7. いわゆる複母音の場合、iはjに置き換える（Vej〔[vai']／旧表記Vei〕、Øje〔['ωiə]／旧表記Øie〕）。
8. 単語を合成して書く言い回しは必要がなければ避け、以下のように書く：uden Tvivil、ikke des mindre、i Almindelighed、i Sigte〔旧表記でそれぞれudentvivil, ikkedesmindre、ialmindelighed、isigte〕。

ヤコブセン『法と筆記』（Henrik Galberg Jacobsen, *Ret og Skrift: Officiel dansk retskrivning 1739-2005*, Bind 1, Odense: Syddansk Universitet Forlag, 2010 ／ https://rohist.dsn.dk/RetogSkriftBind1_samlet.pdfで利用可能［最終閲覧 2021年1月7日］）での特徴づけに基づいて第22版を検討してみると、グロントヴィの正書法（*Ret og Skrift*, s. 450-465）からに、さらにソービュ（Saaby）のそれ（s. 507-535）が反映されていることがわかる。たとえば、「gとkの後でe、æ、øの前にjは記さない」（s. 511）、「sextenのxもksに置き換える」（s. 512）である。実際、第11版Kjøn（性）、Ex.（例Exempelの略記）→第22版Køn、Eks[empel]. などとなっている。したがって、ソービュの正書法までを反映したうえで「改定された正書法による」と題されていると判断される。ここまではあくまでも推測であるので、他日、1872年以降の刷と1891年以降の刷での表題を確認したうえで再検討したいと願う。

22　これには第22版を用いる。符号【22】を付し、単なる付記の場合は異同のある文言（「　」を付す）のみを記す。ただし、正書法はその刷のままとする。なお、本文の校訂が目的ではないので、もちろんすべての異同について記載することはしない。第22版を用いる理由は、参照できる最新の刷であること、また、第11版のデータは一部（s. 8-9）が欠落していることから判断した。

デンマーク語小文法
（Kortfattet dansk Sproglære）

E．ボイエセン（Bojesen）博士　著

第3刷[23]

23　第3版では「序」は所収されていない。以下、付録として「序」（第22版）を採録する。「私が書いた文法を手引きにデンマーク語の初学者に講義する際、どのような講義の仕方をすべきか簡単に述べておきたい。文や品詞に関するさまざまな具体をはなれたルール、マズヴィの文法にならって叙述されたルールを、そのままただちに暗記させることは、まったく私の意図するところでない。デンマーク語の時間にとりかかる毎日の学習で、記号やしるしを使って、本質的な言語現象について学ぶきっかけとなるアイデアを生徒たちに与え、そのようなアイデアを多角的に提示し、生徒たちの理解力にさまざまな面から分かるように説明する機会に教師たちは恵まれている。たとえその場その場ではまったく不完全な言葉の使用であったとしても、教師は少しずつ、そのアイデアをある程度完全で明確な概念にまで展開することになろう。それゆえ教師は、本文法の事例を用いていれば十分である。以上のような前提で、指示にしたがった授業展開を教師はその後の毎日の授業でも採ってもよい。しかし、できる限り、紛れなく、正しく、手短に、一冊の本で概念をすべての生徒たちに一度に提示しようとする教師に本書は無用であろう。その場合、具体から離れることが必要となる。しかしながら、上記のような仕方で分かりやすく理に適った指導を生徒たちが受ける場合、生徒たちは文法を学習するなかで、かなり厳密且つ正確に学校での国語の授業が通常準拠する体系と一致する仕方で、継続的に自分で法則もしくは定義を学び取る。雑駁で曖昧で多少とも誤った形で表現するより、もしくは退屈なほどに詳細な叙述で飽き飽きするように表現されるより生徒の学習にはるかに役に立つ。」

なお、ここで「マズヴィの文法」と言われているのは、おそらくヨハン・ニコライ・マズヴィ（Johan Nicolai Madvig, 1804-86）の *Latinsk Sproglære*（Kjöbenhavn: Gyldendalsk Boghandling, 1841, VI + 488）を指す。マズヴィは非常に優れた文献学者で、政治家としても活躍し1848年に教会・文部大臣ともなった。文献批評の研究から《文法》について理解を深め、この『ラテン語文法』を著すにいたった。本書は「それまでに刊行された類書とくらべて、精確さと明晰さと透徹さで抜きんでている。本書は教科書として使用されるという目論見で書かれたが、当初は一部から反対が起こった。まず新しい文法体系に馴染めなかった教師たちの間で、その後、本書を学校で用いるには難解すぎると考える教師たちからである。そのため、マズヴィは不承不承だが、第4版に際し縮約版（1862, VI + 316）を刊行した。しかしながら、国内のすべてのラテン語学校から古い教科書を次第に駆逐し、すべてが本書に置き換わるまでそれほど時間はかからなかった」（*Dansk Biografisk Leksikon*, XV, København: J. H. Schultz Forlag, 1938, s. 202-203）と評価されている。さらにドイツ語訳を初め各国語に翻訳された。　本書は以下で参照可能である。https://books.google.co.jp/books?id=uucIAAAAQAAJ（2020年12月27日確認、1862年の縮約版はhttps://books.google.co.jp/books?id=F4lEAAAAcAAJ&hl）

コペンハーゲン
C. A. ライツェル出版
ビアンコ・ルノ印刷所[24]
1848年.

文とその要素[25]

Ⅰ.
最も単純な文

§１．言葉は文で言い表される。文は単語を結びつけたものである。単語は人や物を表現している。　例：Drengen skriver.〔少年は［字を］書いている〕 Huset bygges.〔家が建てられる〕

§２．文にはしたがって、次の要素が必要である。

a）主語（Subject / Grundord）　すなわち：表現されている人もしくは物

b）述語（Prædicat / Omsagn）　すなわち：主語について表現することば

注　主語もしくは述語が欠けている場合、先行する要素を補足して考えることになる。

例：Jeg talede først med Manden, dernæst（talede jeg）med Konen.

〔私はまず夫と話し、次に妻と（話し）た。〕[26]

24　Forlagt af Universitets-Boghandler C. A. Reitzel. Trykt hos Kgl. Hofbogtrykker Bianco Luno.

25　以下、本文での文法用語は必要に応じてデンマーク語で示し、支障がない限り、見出し語のかたちで無冠詞・単数形とする。できる限り、今日的な用語に近づけるよう努力したが、そのまま置き換えることはできなかった。また、記号等は分かりやすさのために変更した場合（例えば変化形の関係を「>」で示すなど）があるが、逐一指示はしなかった。その点でテキストの厳密な翻訳でないことをご海容願う。

26　「talede」は今日の「talte」。また、当時のデンマーク語は、ドイツ語と同様に名詞を大文字で書き始める。本文中で、本来文頭であると考えられない場合、大文字を小文字に改めた。

§３．単語はそれだけで何か（人か物）あるものを言表する場合、名詞（Substantiv / Navn または Hovedord）という。 例：Dreng.〔少年〕 Hus.〔家〕 Styrke.〔強さ〕

§４．単語が主語について何か（行為もしくは状態）を表現する場合、動詞（Verbum / Udsagnsord）という。 例：Drengen skriver.〔少年は［文字を］書く。〕 Huset bygges.〔家が建てられる。〕

注 動詞のうち、たとえば er, bliver, hedder, kaldes は単独で用いられず、表現を補うことばが必要である。そのことば、主語とはどのようであるか、になるかなどを示す。 例：Manden er Præst.〔男は牧師である。〕 Drengen hedder Karl.〔少年はカールという名前である。〕 これらを補語（Prædicatord / Omsagnsord）という[27]。

Ⅱ．
より拡張された文、その他の品詞（Ordklasse）

§５．名詞は形容詞（Adjectiv / Tillægsord）をもって、より詳しく説明することができる。すなわち、形容詞は名詞に付されてその特性を叙述する。 例：en flittig Dreng.〔勤勉な少年〕 et stort Hus.〔大きな家〕

注1. 形容詞は上記の例で、属性を表すもの（Attribut）もしくは接続的・付属的である。しかし、次のように言う場合：Drengen er flittig.〔少年は勤勉である。〕 Huset er stort.〔家は大きい。〕 その場合は補語となり、絶対的、単独で現れる。

注2. 名詞と形容詞をまとめて名辞（Nomen, Nævneord〔名詞と形容詞を合わせたものを指すラテン語文法由来の用語〕）という。

27 例に「synes」を加える。なお、「prædicatord」は「komplement」の意味である。論理学用語で、繋辞（copula）を用いて、「AはBである」と表現されたとき、「B」を「prædicatord」と呼ぶ用法にしたがったものと思われる。したがって本稿では「補語」と訳す。
【22】「動詞：er と bliver は別の意味で単独で用いられる。 例： Han er, bliver i Byen.〔彼は街にいる、とどまっている。〕／注２． 述語とは、単独もしくは補語をともなって用いられる動詞である。」

§６．動詞と形容詞は副詞（Adverbium / Biord）によって、より詳しく説明することができる。 例：Drengen skriver godt.〔少年はじょうずに［字を］書く。〕 Huset er meget stort.〔家はとても大きい。〕

注　副詞も他の副詞によって、より詳しく説明できる。　例：Drengen skriver meget godt.〔少年はとてもじょうずに［字を］書く。〕

§７．名詞、動詞、形容詞と副詞は、前置詞（Præposition / Forholdsord）、つまり何かへの関係を表記した語を付加した名詞によって、より詳しく説明することができる。例：Huset i Byen.〔街の中の家〕 at boe i Byen.〔街中に住むこと〕 flink i Geographi.〔地理学が得意〕 Døren paa Huset.〔家のドア〕 at gaae paa Gaden.〔通りを歩くこと〕 rig paa Penge.〔お金がいっぱい〕 Han svarede i høi Grad dumt.〔彼はきわめて愚かな答えをした。〕

注1.　前置詞が置かれているが、何か関係づけられている名詞がない場合、それは副詞となる。　例：Han fulgte med.〔彼はいっしょについて行った。〕 Han gik forbi.〔彼は通り過ぎた。〕以下のように言った場合、 Han fulgte med Broderen.〔彼は兄／弟に遅れずについて行った。〕 Han gik forbi Huset.〔彼はその家を通り過ぎた。〕、それは前置詞である。

注2.　前置詞は副詞によって、より詳しく説明される。　例：nær ved Døren.〔ドアのそば近くに／ved Døren：「ドアのそばに」に対して〕　inde i Huset.〔家の中に／i Huset：「家に／へ」に対して〕

§８．文中の複数の単語が連接される（coordinerede, sideordnede）場合、接続詞（Conjunction / Bindeord）で結びつけることができる。　例：Drengen og Pigen læse.〔少年と少女が［本を］読む。〕 Drengen læser og skriver.〔少年は読み、そして書く。〕[28]

28 【22】「en flittig, men uartig Dreng.〔勤勉だが、行儀のわるい少年〕 Manden og Konen.〔夫と妻〕」 一つ目の例文において、動詞が「læse」となっているのは、直説法・現在・複数形だからである。§29. 注1を見よ。

注　並置されるのは文中にある複数の主語や述語（上記の例のように）、もしくは同一のものをより詳しく説明する複数のことばである。
例：en god og flittig Dreng.〔行儀が良く、勤勉な少年〕 Drengen skriver godt og tydeligt.〔少年は正しく、読みやすく［文字を］書く。〕 Manden gaaer til og fra Byen.〔男は街を行き来する。〕

§９．人や物を、その名前で言い表すかわりに、指示するものによって表記することができる。そのような指示することばを代詞（Pronomen / Stedord）という。
例：Jeg〔私が〕 発話者の名前にかわって用いる。 Du.〔君が〕 呼びかけられた者にかわって用いる。

§１０．代詞は名詞、形容詞、副詞となる。 例：Jeg (Karl) og min (Karls) Broder stode der (i Døren).〔私（カール）と私の（カールの）兄／弟はそこに（ドアに）立っている。〕 Jegは名詞であり、minは形容詞、derは副詞である。

§１１．数を指し示すことば、数詞（Numerale / Talord）は固有の品詞を構成しない。これらは代詞のように名詞に 例：en Million（百万）、形容詞に 例：fire Drenge（４人の少年）、副詞に 例：Jeg glæder mig dobbelt.（倍くらい私は喜んでいる。） tifold lykkelig.（１０倍幸せ）、となる。

注　数の形容詞は、数を指し示す基数詞（Cardinale / Grundtal）
例：fire Drenge〔４人の少年〕か、順序を指し示す序数詞（Ordinale / Ordenstal）例：den fjerde Dreng〔４番目の少年〕のいずれかである[29]。

29 【22】「注２．間投詞（Interjektion / Udraabsord）は、本来ことばではなく、ただの音声であり、例えば o!（おお） ak!（ああ）のように、ある感情を言い表す。」

Ⅲ.
さらに拡張された文

a．動詞に付加された名詞によって

§12．多くの動詞は必ず人や物を名指すことが必要である。その人や物は主語として機能するか、もしくは行為がじかに向かう対象である。後者を目的語[30]（Object / Gjenstand）という。例えば、Jeg siger, jeg seer, jeg finder〔私が言う、私が見る、私が見つける。〕と言えば、誰かもしくは何か、私が言う、見る、見つけるものを知りたいと願うだろう。そのような動詞を他動詞（transitiv / indvirkende）という。他の動詞は孤立して用いられ、上記のような目的語をもつことがない。これらの動詞を自動詞（intransitiv / uvirkende）という。例：Jeg vaager, synker, ligger, falder, gaaer, rider, staaer.〔私は寝ずの番をする、沈む、横たわっている、転ぶ、歩く、乗る、立っている。〕その他の動詞は他動詞、自動詞にそれぞれ用いられる。例：Manden skriver. Drengen læser. Jeg drikker. Jeg kjører.〔男は［字を］書く。少年は［文字を］読む。私は［酒を］飲む。私は［乗り物に］乗る〕　Manden skriver et Brev. Drengen læser en Bog. Jeg drikker Vin. Jeg kjører Dig hjem. Jeg kjører et Par Heste.〔男は手紙を書く。少年は本を読む。私はワインを飲む。私は君を家に乗り物で送る。私は二頭の馬を操る。〕

注1.　上記の自動詞の多くに対応する他動詞がある。例：Jeg vækker, sænker, lægger, fælder.〔私は起こす、沈める、横たえる、倒す〕

注2.　他動詞の中には、kalde や gjøre のように、目的語にくわえて、呼び、働きかける、もう一つのことばが必要であることが少なくない。例：Jeg kalder Drengen Karl.〔私は少年をカールと呼ぶ。〕　Jeg gjorde ham bange.〔私は男を不安にした。〕

注3.　いくかの動詞は自動詞であるが、前置詞なしに同じ語源の名詞にむすびつけられる。　例：at sove en god Søvn.〔よく眠る〕　at døe en herlig

30　ボイエセンは一貫して、対格の目的語に「Object」の語をあて、与格の目的語（間接目的語）には「Hensynsbetegnelse」を用いる。「Object」を「Hensynsbetegnelse」と対照する場合は、断りなくそれぞれ「直接目的語」「間接目的語」と翻訳している。

Død.〔幸せな死を迎える〕 at stride en hæderlig Strid.〔名誉ある戦いを戦う〕 もしくは、特別な意味で（他動詞的に）用いられる。 例：at gaae Ærinder〔用事に出かける〕 at gaae En træt〔歩き疲れる〕[31]

§１３．多くの動詞は、本来の目的語のほかに同時に、その行為が志向する（それに関連する）人や物（Hensynsbetegnelse）を指し示すことが必要である[32]。例えば、私が Han skjænkede denne Bog. Han gav denne Plads.〔彼はこの本を送った。彼はこの場所を与えた〔この場所に置いた〕。〕と言う場合、誰に本を贈ったか、場所を譲った人や物を知りたいと願うだろう。となれば、Han skjænkede sin Broder denne Bog. Han gav Skabet denne Plads.〔彼は自分の兄／弟にこの本を贈った。彼は棚にこの場所を与えた（棚をこの場所に置いた）。〕[33]

注1. 同様のことはたいてい前置詞をもちいて表現することもできる。例：Han skjænkede Bogen til sin Broder.

注2. 自動詞には、それに固有な志向を示す語がある場合もある。Den Sag vedkommer min Fader.〔問題は父に関わる。〕 Dette behagede Kongen.〔これが王を心地よくさせた。〕 Det var mig en stor Trøst〔それは私にとって大きな慰めであった。〕[34]

§１４．長さ、重さ、程度や価値を説明することばは動詞にそのまま付加される。例：Jeg gaaer en Mil. Det veier 3 Pund. Det koster 2 Mark. Det fryser 3 Grader. Jeg levede der 6 Aar (i 6 Aar とも)〔私は一マイル歩く。それは３ポンドの重さがある。それは２マルクの値段である。３度に［温度が］冷えている。私はそこに6

31 【22】それぞれの例に「forette Ærinder ved at gaa」「gøre en træt ved at gaa」との説明が添えられる。

32 このような動詞は志向語、いわゆる間接目的語をとる他動詞と考えられる。

33 【22】「Han sagde mig Sandheden. [...] Planen blev meddelt Broderen〔彼は私に真実を語った。〔中略〕計画は兄／弟に伝えられた。〕」。「Planen blev meddelt Broderen.」は「Man meddelte Broderen Planen.」を受動態で書き表した文である。Broderen と Planen が二つの目的語となる。

34 【22】「Det var mig en stor Trøst」が「Det var mig meget behageligt.〔私にとってそれはとても心地よい。〕」に置き換えられ、さらに例に「Han ligner sin Fader.〔彼は父に似ている。〕」が付記される。

年住んでいた。〕

注1.　これにいくつかの時と場所の説明をくわえてもよい。
例：Han boer Numer 52.〔彼は52番地に住んでいる。〕 Han døde Aar 300.〔彼は300年に亡くなった。〕 Jeg gjorde det mange Gange.〔私はそれを何度もした。〕 Jeg var flere Steder. (paa flere Steder とも)〔私は複数の場所にいた。〕

注2.　そのほかの場合、名詞は前置詞をもちいて動詞に付加される。
例：Han gaaer paa Gaden.〔彼は通りを歩く。〕 Han boer i Huset.〔彼は家に住んでいる。〕

b．名詞に付加された名詞によって

§１５．名詞は他の名詞をもちいて、より詳しく説明することができる。解説のための付加語として同一の人や物を叙述する。これを並置表現［同格］(Apposition / Samstilling)[35]という。　例：Karl den flittig Dreng.〔勤勉な少年、カール〕 Bjerget Vesuv.〔ヴェスヴィオ山〕Fuglen Phønix.〔フェニックスという鳥〕 Kong Karl.〔カール王〕

注1.　並置表現に、名詞に程度や数を、測られたもしくは数えられた名前に付加する場合もふくめられる。2 Tønder Rug.〔２樽のライ麦〕 et Regiment Soldater.〔一連隊の兵士〕 et Stykke Brød.〔ひとかけのパン〕 en Tallerken Suppe.〔一皿のスープ〕 et Glas Øl.〔一杯のビール〕 en Million Pund Smør.〔百万ポンドのバター〕

注2.　個々の場合、並置表現は接続詞で詳しく説明される。例：Han gjorde det som Barn.〔彼はそれを子どものようにした。〕

注3.　形容詞もまた並置表現となりうる。 例： Glad herover gik Karl bort.〔喜んでカールは向こう側へと立ち去った。〕、Han sad bedrøvet.〔悲しみにくれて座り込んでいた。〕、 Han ligger syg.〔彼は病気で臥せっている。〕

35　通例は「同格」。ただし、注2の例を考慮して§15では「並置表現」とした。

Han kastede det som unyttig〔彼はそれが役立たないと捨てた〕[36]

§１６．名詞は他の名詞をもちいて、より詳しく説明することができる。その名詞は、語尾 s をもち、物や人が誰の所有であるか、所属するかを示す。例：Drengen-s Hat.〔少年の帽子〕 Huset-s Høide.〔家の高さ〕 Madvig-s Grammatik.〔マズヴィの文法〕 Amerika-s Opdagelse.〔アメリカの発見〕Himmelen-s Fugle.〔天国の鳥〕 et ti Maaneder-s Barn.〔１０か月の子ども〕 この形態を属格（Genetiv / Eieform）という。

注1. 属格の標識 s は説明となる単語に直接でなく、それ以外の単語の末尾に付記されるときがある。例：Kongen af Danmark-s Lande〔デンマーク王の領地〕は、Kongen-sにかわって Knud den Store-s Hær〔クヌーズ大王の軍隊〕は、Knud-sにかわってである。

注2. 二つの名詞の間の関係は前置詞をもちいて表現されることも多い。例：Kongens Søn と en Søn af Kongen.〔王の息子〕 Drengens Moder と Moder til Drengen.〔少年の母〕 Byens Borgere と Borgerne i Byen.〔町の住人たち〕 Husets Høide と Høiden af Huset.〔家の高さ〕 et ti Maaneders Barn と et Barn paa ti Maaneder〔１０歳の少年〕

注3. 属格や前置詞をもちいるかわりに、それが所在したり所属したりする場所や時の固有名詞を名詞の直前に置くこともある。 例：Aalborg Skole.〔オルボーア学校〕 Sorø Amt.〔ソーロェ行政区〕 Kallundborg Post.〔カルンボーア郵便局〕 Roskilde Kro.〔ロスキレ旅館〕 Korsør Havn.〔コアセェア港〕 Randers Lax.〔ラナース産鮭〕 Tirsdag Aften.〔火曜日の晩〕 しかしながら、いつでもそうなるわけではない。 次のようにもいう。Kjøbenhavns Universitet.〔コペンハーゲン大学〕 Helsingørs Post もしくは Helsingørs Havn〔ヘルシングェア郵便局もしくはヘルシングェア港〕 Holbeks Amt.〔ホルベック行政区〕 Fladstrands Østers.〔フラズストランッ産牡蠣〕

36 【22】「注２」が削除され、「注３」が繰り上がり、「形容詞はこの場合、述語と同様に機能し、行為中の主語の状態を説明する。」が付記されている。

c．形容詞と副詞を付記した名詞をもちいて

§１７．さまざまな形容詞を、その特性が志向する（関連する）人や物を付記することによって、より詳しく説明する。　例：en mig nyttig, vigtig, ligegyldig, skadelig, behagelig, let, vanskelig, nødvendig Sag.〔私にとって、役立つ、重要な、どうでもよい、害のある、気分が良い、やさしい、難しい、必要不可欠な事柄〕 sin Fader lig.〔自分の父と同様の〕　den ham værdig Belønning.〔彼に見合った報酬〕

注1.　この用法は一般に、前置詞をもちいても示される。
　　例：en for mig nyttig, vigtig, o.s.v. Sag.〔同上〕

注2.　副詞も同じように名詞をもって、より詳しく説明することができる。
　　例：Han taler sin Fader ligt または［---］værdigt.〔彼は父と同様に、父にふさわしい仕方で語った〕

§１８．さまざまな形容詞を、通常、長さ、重さ、程度や価値を示す名詞をもちいて、より詳しく説明することができる。　例：tre Alen lang.〔３アレンの長さ〕　to Aar gammel.〔２歳の〕　ti Lod lettere.〔［比較して］１０ロズ分軽い〕　en Smule vred.〔少しばかりの腹を立てている〕　en stor Del bedre.〔大体ましな〕 tre Mark skyldig〔３マルクの借りがある〕　den Opmærksomhed værd.〔注意をむける価値がある〕　den Sag voxen.〔その事柄に適当な〕　det danske Sprog mægtig.〔デンマーク語にきわめて堪能な〕

注1.　副詞も同じように、名詞をもちいてより詳しく説明できる。
　　例：2 Mil herfra.〔ここから２マイル〕　en Time før.〔一時間前〕

注2.　その他の場合、名詞は前置詞を用いて形容詞に付加される。
　　例：begjerlig efter Ære.〔名誉に貪欲な〕　svag af Hukommelse.〔記憶力が弱い〕　fattig paa Forstand〔知性に乏しい〕

Ⅳ.
活用する品詞の詳述。その諸形態と文中の用法

A. 名詞

§１９．名詞は人もしくは物を、その種全体を包括する仕方で、例：Dreng〔少年〕、By〔町、街〕、言い表すか、ある特定の人や物にのみつながる仕方で、例：Karl〔カール［人名］〕、Kjøbenhavn〔コペンハーゲン［地名］〕、言い表す。前者を普通名詞（Appelativ / Fællesnavn）、後者を固有名詞（Proprium / Egennavn）という。

注　固有名詞も普通名詞にもちられることがある。　例：en Judas　つまり、Forræder〔裏切り者〕[37]

§２０．普通名詞は冠詞（Artikel / Kjendeord）をもちいて、より詳しく説明される。冠詞には、１）その冠詞が一つの人や物をそれぞれ示す不定冠詞、例：en Dreng〔少年〕、et Hus〔家〕、そして、２）ある特定の人や物を示す定冠詞、例：Klokke-n〔その鐘〕、Dreng-en〔その少年〕、Hus-et〔その家〕[38]がある。形容詞が名詞に先行する場合、定冠詞は別形をとる。　den gode Dreng.〔よい少年〕、det store Hus.〔大きな家〕

注1.　普通名詞は以下の場合に冠詞を伴わない。ａ）何かを対象としてそれぞれ示すのでなく、非常に一般的に示す場合、例：Guld〔金〕、Kjød〔肉〕、Snedkerarbeide〔家具屋の仕事〕、Tapperhed〔勇敢さ〕、ｂ）Gud〔神〕のように、その本性上、何であるか明確な場合であるか、もしくは、属格や代詞をもちいている場合である。　例：Mandens Hus.〔男の家〕、mit Hus.〔私の家〕、dette Hus.〔この家〕

注2.　２種の冠詞は、形容詞が名詞として用いられている場合、付加される。例：den Gode.〔そのよい人〕、det Gode.〔そのよい物〕、en Tapper.

37　【22】「en Krøsus　つまり、en rig Mand〔富者〕」
38　【22】「Tæppe-t〔敷物〕」。おそらく定形の語尾の例として、-n, -en, et, -tの例を列挙するためであろう。

〔ある勇敢な人〕。固有名詞に形容詞が前置されている場合、定冠詞を付記することがある。例：den vise Sokrates.〔賢いソクラテス〕 det skjønne Frankrig.〔麗しいフランス〕

注3. 個々の場合、定冠詞を省略できることがある。例えば、første Gang.〔はじめて〕 samme Dag.〔同日〕 forrige Aar.〔前年〕 femte Klasse.〔第５学年〕 høire Side.〔右側〕 rette Tid.〔時宜〕 その他、形容詞のあとにも、後続形の定冠詞が用いられる。例えば、hele Dagen.〔一日中〕、største Delen.〔大部分〕 このような場合は特にalとbeggeの後にみられる。 例：al Maden〔食事すべて〕、begge Brødrene〔兄弟両方〕

注4. 定冠詞がともなった名詞に、時や場所の形容詞をそれに後続して付記されることがある。 例：Stedet der.〔その特定の場所〕、Regnen igaar.〔昨日の雨〕 その他の仕方で名詞が特定される場合、同じことがみられる。 例：vor Samtale igaar.〔私たちの昨日の会話〕 Karls Yttringer imorges〔カールの今朝の言葉遣い〕

注5. elとenで終わる名詞は、後続の冠詞の前でしばしばeが除かれる。例：Himmel.〔天空、天国〕 Himl-enまたはHimmelen、Lagen.〔敷布〕 Lagn-etまたはLagenet

注6. 不定冠詞はもともと数詞であり、定冠詞は指示の代詞である。冠詞の後続形で場所をあらわす言葉hinなどがみられることがある。例：Bog-hin〔あの本〕、Bog-hen〔この本〕、Bog-en〔その本〕

§２１．名詞には２つの性（Genus / Kjøn）がある。それは１）共性（Fælleskjøn）であり、男性名詞（Masculinum / Hankjøn）と女性名詞（Femininum / Hunkjøn）をふくむ。例：en Mand.〔男〕 en Kone.〔女〕 en Baad.〔小舟〕 いま一つは２）中性（Neutrum / Intetkjøn）である。例：et Hus.〔家〕 et Bord〔机、テーブル〕

§２２．名詞には二つの数（Numerus, Tal）がある。それは、一つの人や物だけが話題となっている場合、１）単数形（Singularis / Enkelttal）という。Dyr.〔動物〕 Dreng.〔少年〕 Himmel.〔天空、天国〕 Kone.〔妻〕 Sag.〔事柄〕 Mand.〔男〕 Broder.〔兄　弟〕 Bog.〔本〕 複数の人や物が話題となっている場合、２）複数

形（Pluralis / Fleertal）という。　例：Dyr.　Dreng-e.　Himl-e. Kone-r. Sag-er.　母音変化もしくは変音がある場合：Mænd.〔<Mand〕　Brødr-e.〔<Broder〕　Bøg-er.〔<Bog〕[39]

注1.　複数の物や人を考えたとき、個別の対象でなく、集合的なかたまりとみなすとき、単数形が使われることがある。　例：1000 Mand.〔男千人〕　alle Mand.〔すべての男〕　tre Rigsdaler.〔3リィスダラー〕　fire Skiling.〔４スキリング〕　10 Mil.〔１０マイル〕

注2.　el、en、erで終わる名詞は、複数形においてeが除かれる。
例：Himle.〔Himmel：天空、天国〕　Væsner.〔Væsen：存在〕　Agre.〔Ager：農地〕　しかしながら、動詞から派生してその行為者を示す、erで終わる名詞Læsere〔Læser：読者〕、Skrivere〔Skriver：記者〕、とくに民族名Portugisere〔Portugiser：ポルトガル人〕、他のいくつかの単語、たとえばHelgene.〔Helgen：聖人〕Pulvere.〔Pulver：粉〕Bannere〔Banner：旗印〕は例外となる。

注3.　いくつかの単語には複数形がない。　例：Sand.〔砂〕　Guld.〔金〕　Kjød.〔肉〕　Mad.〔食事〕　Smør.〔バター〕　Forstand.〔知性〕　Godhed.〔良さ〕　別の単語は単数形がない。Forældre.〔両親〕、Briller.〔眼鏡〕、Løier.〔冗談〕、Buxer.〔ズボン〕、Mæslinger.〔はしか〕

注4.　不定冠詞は複数形がない。定冠詞の後続形は、eneもしくはneが付される。例：Dyr-ene.〔獣ども〕　Drenge-ne.〔少年たち〕　Koner-ne.〔妻たち〕　Agre-ne〔複数の農地〕　Læser-ne（〔複数形Læsereの〕語末のeは除去される）　定冠詞は形容詞の前で複数形deとなる。例：de gode Drenge.〔善良な少年たち〕　de store Huse.〔大きな家々〕

§２３．名詞は2つの格（Casus / Forholdsform）がある。２つの格とは、１）主格（Nævneform）、もしくは単語の一般的形態、例：Mand.〔男／夫〕、Kone.〔妻〕、Dreng.〔少年〕と、２）属格（Genetiv / Eieform）で、sが付加されている。　例：

39　【22】「Tæppe.（敷物）／Tæppe-r.」が例として単数・複数に付加される。複数で -rとなる例を示すためであろう。

Mand-s. Kone-s. Dreng-s. この格の用法は§16を見よ。

注1. 古語の残滓として、ある言い回しに前置詞に後続する属格がみられる。til Bords.〔テーブルに〕 til Blods.〔血がにじむほど〕 til Fods.〔徒歩で〕 i Mandags.〔先の月曜日に〕 i Aftes.〔昨晩〕 hos Grevensという連語において、Grevens〔伯爵の〕は所有の属格で、その家族、〔建物としての〕家に所属するものを示す。また次のようにいうこともある。Grevens vare der.〔伯爵一家がそこにいる。〕 Jeg besøgte Cancelliraadens.〔私は参事官の家を訪れた。〕

注2. Hjertens Ven.〔心の友＜Hjertets Ven〕、Menneskens Søn〔人の子［＝イエス・キリスト］＜Menneskets Søn〕という形は古語に属する。とくに、Havsens Bund.〔海の底＜Havets Bund〕、Livsens Træ.〔命の木＜Livets Træ〕、al Landsens Ulykke.〔すべての国の災い＜al Landets Ulykke〕、Dødsens.〔死の＜Dødens〕

注3. 古語のその他の残滓は、前置詞に後続する語尾eを名詞がもつ場合である。例：i Live.〔命ある〕 i Tide.〔時間通りに〕 i Sinde.〔心に〕 med Rette.〔正当に〕 til Døde.〔死ぬほど〕 til Orde.〔言葉に〕 for Fode.〔一歩ずつ〕 ad Aare.〔数年後に〕

B. 動詞

§２４．動詞には主要な２形態がある。それは、１）主語がある行為をおこなう、もしくは状態にあることを示す能動態（Activ / Handleform）例：Jeg elsker.〔私は愛する〕 Jeg lægger.〔私は横たえる。〕 Jeg ligger.〔私は横になっている。〕 そして、２）主語に何かが為されることを示す受動態（Passiv / Lideform）である。例：Jeg elskes.〔私は愛される。〕 Jeg lægges.〔私は横たえられる〕

注1. 能動態の動詞は他動詞（transitiv / indvirkende）であるか、自動詞（intransitiv / uvirkende）である。§１２を見よ。他動詞で、その対象〔目的語〕が主語と同一であるとき、再帰動詞（reflexiv / tilbagevirkende）という。例：Jeg græmmer mig.〔私は悲嘆にくれる。〕 Du nærmer

Dig.〔君が近づく／君が自分を近づける〕 Han vægrer sig.〔彼は辞退する。〕 Vi undsee os.〔私たちは躊躇った。〕[40]

注2. 受動態が、複数のものがたがいに作用し合うことを指し示す場合、相互的（reciprokt / gjenvirkende）という。 例：Vi slaaes.〔私たちは殴り合う〕 Vi kappes.〔私たちは競い合う〕 Vi sees.〔また会いましょう／私たちは顔を合わせる。〕 De skjændes.〔彼らは喧嘩をする。〕[41]

注3. 動詞が受動の変化形でありながら、受動の意味で使われていない場合、能動受動態（Deponens / lideform）と呼ばれる。 例：Jeg længes.〔私は望む〕 Jeg færdes.〔私は歩く〕 Jeg ældes.〔私は年をとる〕 Jeg vredes.〔私は立腹する〕[42]

注4. 能動文が受動文に変えられるとき、能動文の目的語が主語となり、能動文の主語に前置詞afが付加される。 例：Karl elsker Faderen.〔カールが父を愛する。〕 Faderen elskes af Karl.〔父はカールによって愛される。〕

§２５．動詞は、例えば、Han kommer〔彼は来る〕のように実際のそうあること、もしくは起こる何かを示すか、例えば、Kom!〔来い〕のように話者の意思や命令を示す。この法（Modus / Maade）のうち、前者を直説法（Indicativ / den fremsættende Maade）、後者を命令法（Imperativ / den bydende Maade）と呼ぶ。デンマーク語ではあまり頻繁に用いられないが、第三の法、接続法（Conjunctiv / den forestillende Maade）がある。接続法は、話者の思考、願望、認容を言い表す。例： Du komme.〔君が来てくれたら［いいのに］〕 Han komme, hvis han tør.〔できることなら、彼が来てくれたらなあ。〕 Det være nu sandt eller ikke.〔ところでそれが真実であろうとなかろうと。〕 Det være sagt〔云わせてもらえば＜それが云われるように〕 Gud give.〔…となるように＜神は与えるだろう〕 Gud velsigne Dig.〔祝福あれ〕 Keiseren leve.〔皇帝万歳＜皇帝が永らえるように〕 Hvad Du kræver af Andre, det giøre Du først selv.〔他の人に欲していることを、まずあな

40 【22】「Jeg græmmer mig.」がのちに差し替えられた。「Jeg vadsker mig.〔私は自分を洗う。〕 Jeg forføjer mig bort.〔私が赴く／私が自分を去らせる〕。」さらに文末に「いくかの動詞は再帰でのみ用いられる。」が付記された。

41 【22】「De mundhugges.〔彼らは口論する／罵り合う。〕」

42 【22】「Jeg blues.〔私は赤面する。〕 Jeg nøjes.〔私は満足する。〕」

たがしなさい。〕

§２６．動詞が行為もしくは状態を主語を参照せずに示す場合、不定法（infinitiv / Navneform）が用いられる。例：komme、at komme〔来ること〕。不定詞（不定法）は、atという単語とともに、主語になる。　例：At love er let.〔約束することは容易い。〕また補語に、　例：At studere er at læse flittig.〔研究とは勤勉に学ぶことである。〕また目的語に、　例：Jeg ønsker at læse.〔私は学ぶことを望む〕　また同格表現に、den Last at drikke.〔飲酒という悪徳〕　また前置詞とともに　例：ved at læse.〔学ぶに際して〕

注1.　動詞 tør、bør、vil、kan、skal、maa、monne、gider〔不定形はそれぞれturde, burde, ville, kunne, skulle, maatte, monne, gideである。〕の場合、目的語となる不定詞は、atなしに接続する。

注2.　不定詞が動詞lader、hørerの目的語になる場合、例えばHan lader bygge. Jeg hører sigeの場合、その不定詞にその目的語、例えばHan lader bygge et Hus.〔彼は家を建てさせる〕、Jeg hører ham rose.〔私は彼が称賛するのを聞いた。〕が接続され、また同様に不定詞の主語、例えばHan lod mig komme.〔彼は私を来させた。〕、Jeg hører ham kalde.〔私は彼が呼んでいるのを聞いた。〕が接続される。不定詞の主語は主動詞の目的語とみなすこともできる。

注3.　他のさまざまな動詞でもまた、さらに後続の不定詞を述語とする名詞を目的語にもつことができる。　例：Jeg seer ham komme.〔私は彼が来るのを見る。〕、Jeg føler mit Hjerte banke.〔私は自分の胸がどきどきするのを感じる。〕、Jeg bad ham gaae.〔私は彼に行くように頼んだ。〕、Jeg bød ham nærme sig.〔私は彼に近づくように命じた。〕

注4.　多くの言い回しでは、不定詞が前置詞なしで、何に関してあることが起こったか、また、何の意図で行為されるのかを示すために付記される。例：Han er let at bedrage.〔彼は欺しやすい。〕　Den Bog er værd at læse.〔その本は読む価値がある。〕　Han har meget at bestille.〔彼は注文しなければならないものがたくさんある。〕Han gik ud at spadsere.

〔彼は散歩しようと外出した。〕 Jeg gav ham Noget at læse.〔私は彼に読むものを与えた。〕 この不定詞に、動詞と通常むすびつく前置詞が続くこともある。 例：smuk at see paa.〔見て美しい〕 Jeg gav ham Noget at lege med.〔私は彼に何か遊ぶものを与えた。〕 Han fik Noget at skjende over.〔彼はあることで叱りとばされた。〕 Jeg fandt En at tale med、つまり med hvem jeg kunde tale.〔私は会話できる人をみつけた。〕

§２７．動詞が名詞の行為もしくは特性としての状態を示す場合、分詞（Participium / Tillægsform）が用いられる。 例：能動で、elskende, bindende,〔愛している、結んでいる〕 受動で、elsket, bunden.〔愛される、結ばれている〕

§２８．動詞が指示する行為または状態は現在（Nutid） 例：Jeg læser (idag)〔私は（今日）、［本を］読んでいる〕[43]、もしくは過去（Fortid） 例：Jeg læste（igaar)〔私は（昨日）読んだ〕、もしくは未来（Fremtid） 例：Jeg vil læse（imorgen）〔私は（明日）読むだろう〕。他の行為と時間との関係で、動詞と同時（samtidig）であるか、先行的（førtidig）もしくは後続的（eftertidig）とみることができる。

§２９．能動態は時制（Tempus / Tid）を表示するために以下の形態をとる。それには助動詞：at have、være、ville、skulle、faae を結合しない形態と結合する形態がある。

現在（Nutid）：

直説法	単数	fanger	複数	fange
接続法		fange		fange
命令法		fang		fanger

過去（Fortid）：

直説法	単数	fangede	複数	fangede

43 【22】のちに「Jeg læser (nu)」〔私は（今）［本を］読む〕に書き換えられた。過去形、未来形にそれぞれ「før」〔以前〕と「siden」〔その後〕が加えられた。

未来（Fremtid）：

直説法　単数　vil / skal fange　　複数　ville / skulle fange

完了（Førnutid）：

直説法　単数　har fanget　　複数　have fanget

過去完了（Førfortid）：

直説法　単数　havde fanget　　複数　havde fanget

未来完了（Førfremtid）：

直説法　単数　faaer fanget または vil have fanget

複数　faae fanget または ville have fanget

現在（同時の／Samtidens）：

不定法　fange

分詞　fangende

完了（先行の／Førtidens）：

不定法　have fanget

未来（後続の／Eftertidens）：

不定法　ville／skulle fange

注1.　複数形は、主語が複数形であるとき、もしくは複数個の主語があるときに用いられる。　例：Mine Brødre leve.〔私の兄弟は生きている。〕Min Broder og min Søster leve.〔私の兄／弟と私の姉／妹は生きている。〕日常会話で複数形が使用されることは稀である。

注2.　現在形（Nutidsform／Præsens）は、ａ）現在もしくは現在との同時性を示す。　例：Jeg læser, naar jeg kan.〔できるとき、私は読む。〕それ以外に、つねに起こる事柄について用いる。　例：Han reiser hver Sommer.〔夏毎に彼は旅行する。〕　現在形は過去の出来事を今あるような生き生きとしたイメージで描く際に用いられる。　例：Karl trænger ind i Rusland, slaaer Fjenden etc.〔カールはロシアに侵攻する〔侵攻した〕、カールは敵を破る〔破った〕等〕　すでに過ぎ去っているが、その作用が続いていることがあるならば、その事柄についても用いられることもある。　例：Jeg hører, at han er reist.〔彼がとうに旅立ったと聞

いている。〕 Livius fortæller.〔リウィウスは語る。［古代ローマの歴史家、したがって彼の行為は今時点で過去の事柄］〕 Jeg har faaet et Brev, hvori han skriver.〔彼が書いた手紙をうけとった。［受け取った手紙が書かれたのは、受け取る前であるので過去の出来事］〕 b）しばしば未来および未来と同時的なことを示す。 例：Jeg kommer imorgen.〔私は明日向かう。〕 Jeg reiser snart.〔私はすぐに旅立つ。〕 Naar jeg seer ham, skal jeg erindre ham derom.〔彼と会うとき、私は彼にそのことを思い出させる。〕

注3. 過去形（Førtidsform／Imperfectum）は過去を示す。 例：Karl den Store kronedes Aar 800.〔カール大帝は800年に王位につけられた。〕 また、過去と同時的なことを示す。 例：Da jeg var der, læste han.〔私がそこにいたとき、彼は［本を］読んでいた。〕 なお、過去形の固有の用法については、§55の注5と注6をみよ。

注4. 完了（Førnutidsform／Perfectum）は、何かが現在に先行し、すでに完結していることを示す。 例：Han har (nu) læst.〔彼は読み終えている。〕 Han er (nu) kommen.〔彼がやってきた。〕 ときにまた、未来の事柄に先行することを示す。 例：Naar jeg har læst, skal jeg komme.〔私が読み終わったら、そちらへ向かおう。〕

注5. 過去完了（Førfortidsform／Plusquamperfectum）は、過去に先行する何かを示す。 例：Han havde læst, da jeg kom.〔私が来たとき、彼は読み終えていた。〕 Da han var kommen, gik jeg bort.〔彼が来ていたが、私は立ち去った。〕

注6. 未来完了（Førfremtidsfrom／Futurum exactum）は、何かが未来の事柄に先行すること、または、何かが未来のある時点で過ぎ去ることを示す。 例：Naar jeg faaer læst, skal jeg komme.〔読み終えられたら、私はそちらに向かう。〕 Paa Mandag vil jeg have læst Bogen ud.〔月曜日にはその本を読み終えるだろう。〕

注7. さまざまな自動詞、とくに運動を意味する自動詞は、それが変化が主語に起こることを示す場合、完了、過去完了において、at have でなく、at være と結合される。 例：Han er gaaet, redet〔＜ride〕, kjørt, løbet,

kommen, flygtet, reist, sovet ind.〔彼は去った、［馬に］乗った。乗り物で行ってしまった、走った、やって来た、逃げてしまった、旅立った、眠り込んだ。〕[44]　他の意味であれば、上記の動詞でも、at have と結合される。　例：Han har reist meget.〔彼は頻繁に旅をしている〕 Han har længe løbet forgæves.〔無益にも彼はながく駆けている。〕 Han har gaaet 3 Mil.〔彼は３マイル歩いている〕 Han har sovet hele Natten.〔彼は一晩中眠っている。〕

注8.　日常会話で、過去完了形の不定法の助動詞が除かれる。
例：Du kunde (have) været rig.〔君は金持ちであったのだろう。〕 Du skulde (have) seet Dig for.〔君は用心すべきであった。〕 Jeg burde (have) gjort det.〔私はそれをすべきであった。〕

注9.　能動の分詞はときに、受動の意味で用いられる。
例：blæsende Instrumenter.〔吹奏楽器〕 mit iboende Hus.〔私の居住する家〕 det forventende Svar.〔期待される答え〕 den holdende Auction〔開催された競売〕

§３０．受動態は時制を表示するために以下の形態をとる。それには助動詞を結合しない形態とat være、blive、vorde、もしくはskulle、ville を結合する形態がある。

現在（Nutid）
　直説法　単数　fanges、bliver fangen
　　複数　fanges、blive fangne
過去（Fortid）
　直説法　単数　fangedes、blev fangen
　　複数　fangedes、bleve fangne
未来（Fremtid）
　直説法　単数　vil / skal fanges、vil / skal blive fangen
　　複数　ville / skulle fanges、ville / skulle blive fangne

44 【22】「未来完了」も付記される。さらに例に「De ere rejste.〔彼らは旅立った。〕」 主語が複数の場合を示したと思われる。

完了（Førnutid）

直説法　単数　er fangen、er bleven fangen.

複数　ere fangne、ere blevne fangne

過去完了（Førfortid）

直説法　単数　var fangen、var bleven fangen

複数　vare fangne、vare blevne fangne

未来完了（Førfremtid）

直説法　単数　vil være fangen、vil være bleven fangen

複数　ville være fangne、ville være blevne fangne

現在（Samtidens）

不定法 fanges、blive fangen

完了（Førtidens）

不定法　være fangen、være bleven fangen

分詞　単数　共性　fangen、中性　fanget

複数　fangne

未来（Eftertidens）

不定法　ville / skulle fanges、ville / skulle blive fangen

注1.　時制の意味と用法は、能動態と同じことがいえる。

注2.　自動詞は、具体的な主体をもたない非人称、つまり具体的な主語を欠いた場合を除いて、受動態をもたない。　例：　Der gaaes.〔何か経過する〕 Der løbes.〔何か推移する〕　しかし、分詞形が複合時称において用いられる。例：Han er gaaet.〔彼は去った。〕　De ere gaaede.〔彼らは去った。〕 Han har ligget.〔彼は横たわっている。〕　De have ligget.〔彼らは横たわっている。〕

注3.　さまざまな動詞では、bliver を結合した形が、過去で使用可能なただ1つの形態である[45]。　例：　Jeg blev tvungen.〔私は強いられる。〕／ *tvanges.［＜tvang＜tvinge］でなく。　Blev bidt.〔咬まれた〕／ *bedes［＜bed＜bide］でなく。　Vinen blev drukken.〔ワインが飲ま

45　以下、実際に使用されない形態には「*」を付す。

れた〕／ *drakkesでなく［＜drak＜drikke］ Blev stjaalen.〔盗まれた。〕／ *stjales［stjal＜stjæle］でなく。

注4. 過去分詞はいくつかの動詞で、tで終わる。 例：hold-t、hæng-t、græd-t、strid-t、またはetで終わる 例：elsk-et、bed-et、tru-et。その他の動詞、とりわけ母音が交替する動詞では、過去分詞は共性でen、中性でetの語尾となる。 例：〔fældeの場合〕fald-en、fald-et、〔bæreの場合〕baar-en、baar-et、〔vindeの場合〕vund-en、vund-et 複数で、〔-tで終わる過去分詞で〕-teとなる。 例：hold-te、〔-etで終わる過去分詞で〕-edeとなる。 例：tru-ede、elsk-ede（elsk-teも）、〔-en、-etで終わる過去分詞で〕neとなる。 例：baar-ne、fald-ne、vund-ne

注5. 完了形における分詞はhaveまたはfaaeと結合されても、-tで終わる分詞は活用しない。 例：Jeg har baaret.〔私は耐えた。〕 Vi have baaret.〔私たちは耐えた。〕 Jeg har ligget.〔私は横たわっている。〕 Vi have ligget.〔私たちは横たわっている。〕

注6. 過去完了形er fangenは完結している行為とその持続する効果を示し、er bleven fangenは生起した出来事を示す。ある動詞では前者の形で、ほぼ状態のみを示し、その結果：Han er elsketはほとんどHan elskesもしくはHan bliver elsketと同じである。

注7. いくつかの能動受動動詞において、sでおわる分詞形が用いられる[46]。例：Det er lykkedes.〔それはうまくいった〕 Han har slaaedes.〔彼は喧嘩をした〕 De have enedes.〔それらは一体となった〕

§３１．デンマーク語には二種類の活用（Conjugation）、動詞を活用させる方式がある。第一活用は、語尾ede、de、teを付して過去形をつくる。

例：lytt-ede、tæk-te. 変音、母音交替がときに伴う。 例：lægger〔横たえる〕＞lag-de、siger〔言う〕＞sag-de、sælger〔売る〕＞solg-te、spørger〔尋ねる〕＞spurg-te. なかには変音がある過去形と変音がない過去形の両方がみられる動詞もある。 例：vækker〔目覚めさせる〕＞vække-de、vak-te

46 受動の完了形なので形態的には「不定形＋des」となる。【22】で「des」で示される。

第二活用は、語尾なしの一音節で過去形をつくる[47]。
例：løber〔走る〕＞løb、græder〔泣く〕＞græd、sover〔眠る〕＞sov.
変音が伴う場合も珍しくない。
例：lyder〔鳴る〕＞lød、lyver〔偽る〕＞løi、lider〔苦しめる〕＞led、lader〔させる〕＞lod、drikker〔飲む〕＞drak.

注1. 動詞によって、両方の活用にしたがう場合もある。
例：klinger〔響く〕＞klang / kingede、skjælve〔震える〕＞skjalv / skjælvede、graver〔掘る〕＞grov / gravede[48]。

注2. 第二活用の動詞の中には、過去形で単数と複数が同じものがある。
例：fandt、traf、sov、græd、løi. 他の第二活用動詞では複数で e を付加する。 例：Jeg stred、vi strede〔私／私たちは争う。〕、jeg skrev、vi skreve〔私／私たちは書く。〕、jeg bad, bar、vi bade, bare.〔私／私たちは頼む／耐える。〕

注3. 受動の分詞〔過去分詞〕で、いくつかの動詞は過去形と同じ変音をする。
例：følger〔従う〕、fulgte、fulgt、bliver〔なる、とどまる〕、blev、bleven. 他の動詞は別の変音をする。 例：bærer〔運ぶ、耐える〕、bar、baaren. また他の動詞は過去で変音があるが、分詞形には変音がない。bider〔咬む〕、bed、bidt；jager〔逐う〕、jog、jaget.

C．形容詞

§３２．形容詞は、名詞と同様に性と数で活用できる。

注1. 直接に名詞に連接しない場合、形容詞も属格をもつ。 例：den store Drengs og den lilles.〔大きな少年と小さな［少年］の〕 de rige Bønders og de fattiges.〔豊かな農民たちと貧しい農民たちの〕

注2. 形容詞から語形変化なしに 例：fast〔しっかりと〕、flydende〔流れる

47 ボイエセンは動詞活用一覧を示していないので、本翻訳の末尾に主要動詞の活用表を付録としている。
48 【22】「またsvinger〔振る〕、jager〔逐う〕も同様」

ように〕、endelig〔とうとう〕、もしくは t を加えて 例：godt〔良く〕、ædelt〔気品をもって〕 副詞がつくられる。

§３３．形容詞が無冠詞、もしくは不定冠詞を伴う場合、その形容詞は属性でも、補語でも、つながる名詞に性と数においてしたがう。たいていの形容詞は中性形を、t を付加することによって、複数形を e を付加することによってつくる。 例：en god Dreng.〔良い少年〕 et stor-t Hus.〔大きな家〕 Drengen er god.〔少年は良い。〕 Huse-t er stort.〔家は大きい。〕 god-e Drenge.〔良い少年たち〕 stor-e Huse.〔大きな家々〕

注1. el、en、er に終わる形容詞は複数形で e が除かれる。 例：aaben、aab-ne [＜*aabene].〔開いている〕 ædel、ædle [＜*ædele].〔高貴な〕[49]

注2. egen、megen、liden は中性でtの前のnが脱落する[50]。en に終わる分詞、n に終わる多くの代名詞においても脱落するのと同様である。その結果、mangen も mangt に、ingen も intet となる。

注3. 強勢のないetで終わる形容詞は、分詞と同様に複数形でedeとなる。例：stribet〔縞の〕＞stribede、broget〔色とりどりの〕＞brogede、しかし、ret〔正しい〕はrette、hon[n]et〔名誉ある〕はhon[n]et-teとなる。

注4. いくつかの形容詞は性で活用しない。 例：udvortes〔外側の〕、kort〔短い〕、fremmed〔異質な〕、ringe〔僅かな〕、bange〔不安な〕、bly〔内気な〕 他の形容詞は数で活用しない。udvortes、ringe

§３４．形容詞に定冠詞が伴う場合、つねにeの語尾となる。 例：den god-e Dreng.〔良い少年〕 det stor-e Hus.〔大きな家〕 de god-e Drenge.〔良い少年たち〕 de stor-e Huse.〔大きな家々〕 いくつかのsで終わる形容詞を除く。
例：udvortes〔外側の〕、stakkels〔あわれな〕、fælles〔共通の〕

---

49 【22】「tapper、tapre [＜*tappre＜*tappere].〔勇敢な〕」 Tapre＜*tapp-reについて、子音字 -l, -n または -rの直前に二つの同じ子音字がある場合、一つの子音字が脱落する。ただし、従来の正書法では子音字はそのまま維持される。

50 「eget < *egent、meget < *megent、lidet < *lident.となるのは、fanget < *fangent、mit < *mint」と同様ということ。

注1. el、en、erに終わる形容詞はこの場合、el、en、erのeが脱落する。また、強勢のないetはedeとなる。

注2. 形容詞は、他の以下の場合で説明されたときも、同じ語尾eをとる。ａ）疑問と不定を示す代詞をのぞく代詞によって、 例：jeg svage Menneske.〔弱い人間である私〕 Du gode Dreng.〔良い少年である君〕denne gode Dreng.〔この良い少年〕 min gode Dreng.〔私の良い少年〕 ｂ）属格によって、 例：Mandens store Hus〔その男の大きな家〕 ｃ）呼びかけにおいて 例：Gode Dreng！〔なんと良い少年！〕 Bedste Ven！〔最高の友よ！〕 しかし、egen、megen、lidenは例外である。 例：min egen Søn.〔私自身の息子〕 den liden (lille) Dreng.〔小さな／幼い少年〕 egenは複数でegneとなる。 例：mine egne Børn また同様に単数でも「固有の」という意味であるとき：den ham egne Godmodighed.〔彼に固有の実直さ〕[51]。

§３５．形容詞が示す特性はそのまま 例：et stort Hus〔大きな家〕、と付記される。もしくは他の人や物より高い程度で 例：et større Hus〔より大きな家〕と、最高度で 例：det største Hus.〔最大の家〕と付記される。Karl er høiere end Peter.〔カールはペーターより背が高い。〕 Af disse to er Karl den høieste.〔その二人の中でカールは一番背が高い。〕[52] それぞれ順番に原級（Positiv）、比較級／第一比較形（Comparativ / den første Sammenligningsform）、最上級・第二比較形（Superlativ / den anden Sammenligningsform）と呼ぶ。

注. ある形容詞はその意味により比較の形態をもちえない。 例：al〔すべての〕、ulden〔ウールの〕

§３６．比較級は原級にereまたはreを添える、最上級にestまたはstを添える。

51 【22】a）の末尾に「しかし、hvilken god Dreng？〔どの良い少年？〕、しかし、enhver god Dreng〔各々の良い少年〕となる」、c）の例に加えて「den meget Pragt〔たいへんな華麗さ〕」

52 【22】例文に替えて「Af disse er Karl den højeste. 〔その者たちの中でカールは一番背が高い。〕」 二つのものをくらべる比較級との対照で考えれば、三つ以上での最高度を示す最上級としては【22】での例が適当である。

例：lav〔低い〕＞lav-ere＞lav-est、ringe〔僅かな〕＞ringe-re＞ringe-st

注1.　el、en、erに終わる形容詞は比較形でも、eが除かれる。　例：ædel〔高貴な〕＞ædl-ere＞ædl-est、moden〔熟れた〕＞modn-ere＞modn-est[53]

注2.　いくつかの形容詞は比較級でeをもつが、最上級の活用ではeをもたない。例：blodig　〔血まみれの〕＞blodig-ere＞blodig-st、sparsom〔質素な〕＞sparsomm-ere＞sparsom-st、lang〔長い〕＞læng-ere＞læng-st

§３７．いくつかの形容詞では比較級と最上級が、mere、meestを原級に加えることでつくられる。　例：fremmed〔異質な〕、bedrøvet〔悲しんでいる〕、krigerisk〔好戦的な〕[54]

他の形容詞は変音がともなう。　例：stor〔大きい〕＞stør-re＞stør-st、ung〔若い〕＞yng-re＞yng-st　また、他の形容詞はまったく別の形態となる。　例：god〔よい〕＞bed-re＞bed-st、gammel〔古い、年取った〕＞æld-re＞æld-st　いくつかの形容詞では原級が欠ける。　例：ydre＞yderst〔外部の、最外部の〕、さらに他の形容詞では原級も比較級も欠ける。sidst〔最後の〕、bagest〔末尾の〕[55]

注　副詞は形容詞の同様に比較形をつくる。
例：tappert〔勇敢に〕＞tappr-ere＞tappr-est

§３８．比較級は他の形容詞のようにeで終わり、性と数で活用しない。
例：en større Mand〔一人の大柄の男〕、den større Mand〔その大柄の男〕、de større Mænd〔その大柄の男たち〕、Han er større.〔彼は大柄である。〕

§３９．最上級は他の形容詞のように活用する。けっして不定冠詞が付くことはなく、無冠詞もしくは定冠詞をともなう。例：størst Flid.〔最大の熱心さ〕　den

53　【22】「tapper〔勇敢な〕＞taprere＞taprest」
54　【22】「levende〔活き活きとした〕、fælles〔共同の〕」
55　【22】別の形態となる例に「ond〔悪い〕＞værre＞værst、lille〔小さい〕＞mindre＞mindst」が、原級が欠ける例に「indre＞indrest〔内部の、内奥部の〕」が、原級も比較級も欠ける例に「først〔最初の〕」が加えられる。

største Flid.〔かの最大の熱心さ〕 de største Mænd.〔もっとも大きな男〕 無冠詞の補語の場合、複数で活用を欠く。例：Husene ere høiest undenfor Byen.〔それらの家は郊外でもっとも背が高い〕 Børnene ere gladest om Aftenen.〔夕方に子どもたちはもっとも喜んでいる〕 しかし、以下の場合はそうでない〔つまり、冠詞をともなう〕。 Disse Børn ere de gladeste af alle.〔これらの子どもたちはすべての子どもたちの中でもっとも喜んでいる。／定冠詞が伴うため〕

D．代[名]詞

§４０．ある名詞的代詞には３つの格がある。つまり、ａ）主格（Nævneform）、この格で代詞は主語となる、例：han。ｂ）属格（Eieform / Genetiv）、例：hans、ｃ）対格（Afhængighedsform）、この格で代詞は他のすべての場合に用いられる、例：Jeg elsker ham.〔直接目的語：私は彼を愛している。〕、Jeg gav ham Bogen.〔間接目的語：私は彼に与えた。〕、med ham〔前置詞をともなって：彼とともに〕、Det bliver ham, som vinder derved.〔強調の構文などで：その際に勝利するのは彼となるだろう。〕、Hvis jeg var ham, gjorde jeg det ikke.〔補語：私が彼なら、そうしなかった。〕

§４１．人称代名詞は語る者（一人称）、語りかけられる者（二人称）、語られている人またはもの（三人称）を示す。それらは名詞的である。

		Ⅰ．	Ⅱ．	Ⅲ	
単数	主	jeg	Du	ham、hun	den、det
	対	mig	Dig	ham、hende	
	属	—	—	hans、hendes	dens、dets
複数	主	vi	I	de	
	対	os	Eder（Jer）	dem	
	属	（vores）	Eders（Jeres）	deres	

注1. denは本来、指示代名詞である。voresという形態は書き言葉ではあまり使われない[56]。

56 【22】「jer、jeres」も「vores」と同様の例として加えられる。

注2. sig（対格のみ）は再帰的（reflexiv）、文の主語を再帰的に指示する代名詞で、三人称の単数と複数に用いられる。 例：Han vender sig.〔彼は向きを変える。［＝彼は自分に向きを変えさせる。］〕 De vende sig.〔彼ら／彼女らは向きを変える〕 再帰代名詞は分詞でも[57]、それらが文に組み込まれてsigにおいて再帰用法となる場合でも用いられる。再帰的でなければ用いられない[58]。 例：Gud ophøier den sig selv fornedrende Mand.〔神は遜った人間を高める。〕、つまり［Gud ophøier］den Mand, som fornedrer sig. Han udfører det ham paalagte Arbeide.〔彼は自分に課せられた仕事を実行する。〕、つまり［Han udfører det Arbeide,］som er ham paalagt. 不定詞において再帰用法は以下のいずれかである。文の主語に再帰する場合[59] 例：Han bad mig følge sig hjem.〔彼は、私に自分を家に連れていくよう頼んだ。〕、Han lod mig komme til sig.〔彼は、私が自分のところに来るように強いた。〕 それだけでなく、不定詞が文の一部となっているが、その不定詞の主語となる単語に再帰する場合[60] 例：Jeg bad ham pakke sig.〔私は、彼に自分の荷物をまとめるように頼んだ。〕Jeg lod ham passe sine Ting.〔私は、彼に自分の所有物に気を配るように強いた。〕Jeg saae ham støde sig.〔私は、彼が傷ついたのを見た。〕Jeg befalede, forbød, paalagde, tvang ham til at vende tilbage til sit Hus.〔彼に自分の家に戻るように、私は命じた、禁じた、

57 【22】「形容詞でも」

58 再帰代名詞sigは主語からの再帰であるので、一つ目の例文ではden Mandが元の副文でも主語である［den Mand, som fornedrer sig］ので、形容詞句に縮約された表現でもsigとなるが、二つ目の例文では、主文の主語がhanである一方、元の副文でdet Arbeideが主語である［det Arbeide, som er ham paalagt］ので、形容詞句でsigは用いられない。

59 「Han bad mig følge sig hjem.」「Han lod mig komme til sig.」において、「følge」「komme」の不定詞句は文として「Jeg følger ham hjem.」「Jeg kommer til mig ham.」であり、元の文の「mig」（＞jeg）が主語で、再構成された文の「ham」が目的であるが、例文では、文の主語に再帰するので「ham」が「sig」となる。

60 「Jeg bad ham pakke sig.」「Jeg lod ham passe sine Ting.」「Jeg saae ham støde sig.」「Jeg befalede, forbød, paalagde, tvang ham til at vende tilbage til sit Hus.」において、「pakke」「passe」「støde」「vende」の不定詞句は文として「Han pakker sig.」「Han passer sine Ting.」「Han støder sig.」「Han vender tilbage til sit Hus.」であり、再構成された文でも代名詞は再帰的である。最後の例文での「sit」は「sig」の所有代名詞である（§45を見よ）。なお、主語に再帰しない三人称の所有関係は、代名詞の属格hans、hendes等で表される（§41を見よ）。

指示した、強要した。〕 しかしながら、この場合、ときに意味が曖昧になる場合がある。 例：Han saae Karlen løbe med sit Tøi.〔彼は、カーレンが［主語の］彼のという意味で／カーレン自身のという意味で玩具を手に走っているのを見た。〕

注3. hinanden（とりわけ2つものに関して）とhverandre（とくに複数のものに関して）は相互代名詞であり、言い換えれば、もしくは相互的作用（gjensidig Indvirkning）を示す。両者ともにすべての複数の人称に用いられ、属格：hinandensとhverandresをもつ。

注4 個々人への語りかけでは二人称として、単数の動詞と共にI、Han、Deも用いられる。 例：De seer、I seer.〔貴方は見ます。君は見ます。〕Deはまた複数の者への語りかけでも用いられる。 例：De see, mine Herrer!〔貴方たちは見ます、諸君。〕

注5. 二人称の代名詞としてDeは対格において再帰用法でもDemをとり、sigとなることはない。 例：De støder Dem.〔貴方は傷つく。〕 三人称としてもdemは、日常会話においてしばしば再帰的に用いられる。
例：De undsee dem.〔貴方がたはためらう。〕

注6. hanとhunは通常、人間についてのみ用いられる。動物の雄と雌については、共性：denが用いられる[61]。

§４２．指示（demonstrativ / paapegende）代名詞、何か具体的なものを指示する。

単数	主格	den、det	denne、dette	hin、hint
	属格	dens、dets	dennes、dettes	hins、hints
複数	主格	de	disse	hine
	対格	dem		
	属格	deres	disses	hines

注1. これらの代名詞は名詞と形容詞とに用いられる。形容詞としては性と数

61 【22】「動物の雄と雌については、共性：den（Heste-n、Hund-en）もしくは中性：det（Æslet＜Æsel、Svin-et）が用いられる」と改められる。

だけで活用する。

注2.　denneは相対的に近いもの、hinは相対的に遠いものを示す。これらの語がすでに言及したものや人に遡って示す場合、denneは後に言及したものを指し、hinは先に言及した者を指す。

注3.　指示の意味はselvにもある。単語の前に置かれる場合、ときにselveの形をとる。　例：selve Kongen、selve Kongerne〔王みずからが、王たちみずからが〕　しかし、Kongen selv、Kongerne selv.　さらに、begge、属格　begges　そして、samme、属格　sammes
例：Jeg gav ham et Brev og bad ham gjennemlæse samme.〔私は手紙を送り、その［送ったのと同じ］手紙を通読するように頼んだ。〕

§４３．関係（relativ / henførende）代名詞は　ある文を、文全体もしくはその文の一部をより詳しく具体的に表し説明するために、もう一つの文に強く結びつける[62]。

単数				
主格	som、der	hvilken、hvilket	hvoまたはhvem（der）	hvad（der）
対格	som	hvilken、hvilket	hvem	hvad
属格	hvis			
複数				
主格	som、der	hvilke		
対格	som	hvilke	hvem	
属格	hvis			

注1.　hvoとhvemの形は人にのみ用いられる。

注2.　hvilken、hvilketは、名詞的にも形容詞的にも用いられる。他の形態は名詞的にのみ用いられる。

注3.　対格のsomは、文の直接目的語と間接目的語に用いられるが、その前に

62　【22】「例：Den Mand, som du nævner, er her.〔君が名指した人はここにいる。／den Mandをsom以下が説明する。〕、Jeg har sejret, hvilket du næppe vil tro.〔私は勝利した、それを君はほとんど信じないだろう。／hivlket直前の文章すべてを承けて、troの目的語となっている。〕」

前置詞が置かれることはない。

§４４．疑問（interrogativ / spørgende）代名詞　は、質問で用いられる。

単数	主格	hvo または hvem	hvad	hvilken、hvilket
	対格	hvem	hvad	hvilken、hvilket
	属格	hvis		
複数	hvilke をのぞいて特別の形態がない。			

注．hvilken、hvilket と hvad は名詞と形容詞の両方に用いられる。
例：Hvilken vælger Du ?〔どれを君は選ぶか。〕、Jeg veed, paa hvad (もしくは hvad for en) Maade Du handler.〔どのような仕方で君が行為するか、知っている。〕、Hvad Nyheder bringer Du ?〔どのような知らせをもってきているのか。〕、Sig mig, hvad (hvad for) Mennesker Du omgaaes.〔君がどのような人間と交際しているか、私に言ってみよ。〕、Hvad Grund har Du ?〔君はどのような理由があるのか。〕、Hvad er Grunden dertil ?〔その理由は何なのか。〕、hvo もしくは hvem は名詞的にのみ用いられる。

§４５．所有代名詞（possesiv Pronomen / Eierstedord）は jeg、vi、Du そして sig の属格に代えて用いられる。

単数	一人称	min、mit	vor、vort	複数	mine	vore
	二人称	din、dit	jer、jert		dine	jere
	三人称	sin、sit			sine	

注1.　これらの代詞は形容詞的である。sin は再帰的であり、単数の主語に再帰する。複数の主語では deres となる。
注2.　jer、jert は書き言葉で用いられることは稀である。書き言葉では Eders が用いられる。
注3.　呼びかけにおける所有代名詞［din、dit］の用法、とくに罵詈表現にお

ける用法に注意せよ。din Gavtyv〔この詐欺師〕、din Esel〔この間抜け〕、din slette Karl !〔哀れなカール〕[63]

§４６．不定代名詞（indefinit, ubestemt Pronomen）は人や物を、一般的にもしくは非特定的に指し示す。

不定代名詞に属するのは：

man　主語のみに使われる。例：Man siger.〔ある人・誰かが言う。〕

En　例：Han kan ikke lade En være i Fred.
〔彼は人を安心させることができない。〕
属格　Ens　例：Ens Eget〔ある誰かその人の〕

det　［非人称で］　例：Det regner.〔雨が降る〕
Det fælles, at [...].[64]

hver、hvert　enhver、ethvert
nogen、noget　複数　nogle
anden、andet　複数　andre
somme[65]

以上、名詞的にも形容詞的にも

注1.　Enは本来、数詞であるが、強勢が失われた場合、不定代名詞となる。さらに［不定代名詞としては］不定冠詞を伴う。例：en slem En.〔一人のひどい奴〕　形容詞的な不定代詞としては不定冠詞である。

注2.　不定代名詞manとdetは主語である場合、動詞と文は非人称（impersonal / upersonlig〕と言う。例：Man troer.〔信じられている。〕　Det regner.〔雨が降る〕　Det varer længe.〔時がかかる〕　Det er godt Veir.〔良い天気である〕　Det var ham, som gjorde det.〔それをしたのは彼である。〕　Det undrer mig at see.〔会って驚く［会っていることが私を驚かす］〕

63　【22】「dit Afskum〔この人間のくず〕」が付記される。中性の例だと思われる。
64　【22】「以上、名詞的に」
65　【22】「nogle, visse」

Det er mig ubegribeligt, hvorfor han har gjort det.〔彼がなぜそうしたか、私には理解できない。〕

注3. 代詞的な副詞は指示詞的副詞　例：強勢が置かれた derであるか、関係詞的副詞　例：hvorであるか、もしくは疑問詞的　例：hvor? である。無強勢のderは不定の副詞である。これは非人称の受動態の文に用いられる。例：Der læses.〔読まれるべきである。〕 自動詞、再帰動詞の能動でもこの語に単数で連接し、その後に主語の説明が続く。例：Der er foregaaet / der har tildraget sig mange Ting.〔たくさんのことが起こった〕 Der kommer ingen Mennesker i Aften.〔今晩だれも来ないだろう〕 Der støder sig Mange paa Bjelke.〔多くのものが梁にぶつかる〕 代詞はこの仕方で用いられる場合、主格と対格の間で言い方は揺れ動く。例：Der er / der gives de, som troe. または Der er / der gives dem, som troe.〔信じている人がいる。〕

さまざまな種類の文

§４７．文は直示的（fremsættende） 例：Drengen læser.〔少年は読む〕であるか、質疑的（spørgende） 例：Læser Drengen ?〔少年は読んでいるか？〕かいずれかである[66]。質問の答えがja〔肯定〕とnei〔否定〕にとどまるならば、疑問文は単語の配置だけか、もしくは疑問の言葉monをそえて示す。

例：Mon Drengen læser ?〔いったい少年は読んでいるのか。〕答えが他の情報を含むならば、疑問代名詞と疑問副詞をもちいて尋ねる。

例：Hvem læser ?〔誰が読むのか。〕 Naar[67], hvor, hvorfor læser Drengen ?〔いつ、どこで、なぜ少年は読んでいるか。〕 Hvad gjør Karl ?〔カールは何をしているか。〕

66 【22】「文は」に「命令法（bydende） 例：Læs, Dreng！ であるか、もしくは接続法（forestillende / ønskende, indrømmende）例：Gud give !〔神は与えられる〕 であるか、もしくは」という一節が先行する。また「直示的（fremsættende）か質疑的（spørgende）」の個所は「直示的［ここでは直説法と訳しうる］（肯定的、否定的、疑問的： bekræftende, benægtende og spørgende）」と言い換えられている。

67 現在のデンマーク語では、hvornårを用いる。

注. 疑問文でとくに情報を望んでいる単語が強勢で強調される。
例：Læser *Karl*？〔カールが読んでいるのか。〕Nei, Peter.〔いいや、ペーターだ。〕 *Læser* Karl？〔カールは読んでいるのか。〕Nei, han skriver.〔いいや、彼は書いている。〕 *Hvorfor* læser Karl？〔なぜカールは読んでいるのか。〕For at lære Noget.〔何かを学ぶためです。〕Hvorfor *læser* Karl？ Fordi han ingen Pen har.〔彼はペンをもっていないからです［書けないから読んでいる］。〕 Hvorfor læser *Karl*？ Fordi han trænger mere dertil end Peter.〔ペーターよりそのことに飢えているからです〕

§４８．文は、それだけで独立した内容を語る主文（Hovedsætning）か、独立していない副文、従属した文（Bisætning / subordinerede (underordnede) Sætning）か、そのいずれかである。副文は接続して他の文の一部を構成するか、文全体または文中の単語を補い、説明するために付加される。
例：Da jeg kom, læste Drengen.〔私が来たとき、少年は読んでいた。〕本来、私が話したかったことは、少年が読んでいた〔Drengen læste〕いうことである。もう一つの文〔Da jeg kom〕を私は、それがいつであったかを詳しく示すために付け加えている。 Jeg veed, at Drengen læser.〔私は、少年が読んでいることを知っている。〕 私が話したいのは、少年が読んでいるということでなく、私が何かを知っている〔Jeg veed〕ということである。副文は、私が知っているのが何であるかを付け加えている。

注. 副文はそれ自身に従属した文をさらにもつことができる。
例：Da Manden, som boer i dette Hus, kom, læste Drengen.〔この家に住む男が来たとき、少年は読んでいた。〕 Jeg veed, at Drengen læser, naar han har leget.〔少年は遊び終わってから、本を読むことを、私は知っている。〕

§４９．副文は、主文に関係詞、疑問詞、接続詞で結びつけられる。それぞれの文を関係文、疑問文、接続文という。

注. 個々の文で［等位］接続詞は、並置された単語を結びつけるだけである。

しかし、接続詞は並置された文を相互に結びつけるだけでなく、主文に副文を接続する。

§５０．関係文は名詞的であるか副詞的である。例：Den Dreng, som var her, læste.〔そこにいる少年は読んでいる。〕 Han blev, hvor han var.〔彼は、彼がいる場所にとどまった。〕

注1. 関係代名詞は、関係詞につながる単語が直前に先行する場合、目的格であれば省略することができる。例：den Bog, han læste（直接目的語）.〔彼の読んだ本〕 den Mand, jeg gav Bogen（間接目的語）.〔私が本を与えた男〕 det Hus, jeg bor i（動詞のあとの前置詞とともに）.〔私が住んでいる家〕 指示副詞herとderがある場合も、関係詞は名詞形であれば省略できる。例：Manden, her（もしくはder）gaaer, har sagt det.〔ここ（もしくは「そこ」）を歩いている男がそう言った。〕

注2. 以下の語の付加に注目されたい。関係詞hvem（hvem der）、hvad（hvad der）、hvilken、hvisは同時に主文と副文とに属する。例：Han tog hvad der kunde tages.＜ [Han tog] det, som [kunde tages.]〔彼は、自分がとることができるものをとった。〕 Han bortførte hvem han vilde.＜ [Han bortførte,] den / Enhver, som [han vilde.]〔彼は、自分が望んだ者を連れ去った。〕 Han spiste hvad han fik Lyst til.＜ [Han spiste] det, som [han fik Lyst til.]〔彼は、自分が食べたいものを食べた。〕 Efter hvad her er foregaaet＜Efter det, der [er foregaaet.]〔それが起こった後〕 Han gik med hvem han vilde.＜ [Han gik] med den, med hvem [han vilde.]〔彼は、自分が望んだ者と歩んだ。〕 Han kan benytte hvis Baad han vil.＜ [Han kan benytte,] dens Baad, hvis Baad [han vil.]〔彼は、自分が望んだ小舟を使った。〕 関係副詞でも同様である。例：Han sad hvor han pleiede.＜ [Han sad] der, hvor [han pleiede.]〔普段彼がそうしている場所に、彼は座っている。〕 Jeg kom, hvorhen jeg skulde.＜ [Jeg kom] derhen, hvorhen [jeg skulde.]〔私が向かうべき場所へ私は来た。〕

§５１．疑問の副文（Spørgebisætning）は間接もしくは従属疑問文（indirekt / afhængig Spørgesætning）と呼ばれる。従属疑問文は、om[68]もしくは他の疑問詞（疑問代名詞と疑問副詞）をもちいて結びつけられる。例：Jeg spørger, om Du reiser.〔君は旅しているのか、と私は尋ねた。〕 Jeg veed ikke, hvem der har gjort det.〔誰がそれをしたかを、私は知らない。〕

§５２．そのような従属疑問文は主語となることができる。例：Om Du har gjort det, er uvist.〔君がしたかどうかは、不確かである。〕 また、目的語となることができる。例：Jeg veed, hvorfor Du har gjort det.〔私は、なぜ君がそうしたかを知っている。〕 間接疑問文は前置詞でも結びつけられる。例：Jeg er ikke vis paa, om Du har gjort det.〔君がそれをしたかどうか、私は確信がない。〕 Han talede[69] om, hvor tidt han var bleven narret.〔彼は、何度自分が馬鹿にされたかを語った。〕 Jeg tænker paa, hvorfor han er reist.〔私は、彼がなぜ旅立ったかを考えている。〕

§５３．接続文はatもしくは他の接続詞によって結びつけられる。

§５４．atという接続詞をもちいて、文章全体を名詞として用いることができる。文章全体が主語である場合　例：At han læser, er godt.〔彼が読んでいることは、良い。〕 目的語である場合　例：Jeg veed, at han læser.〔彼が読んでいることを、私は知っている。〕 補語である場合　例：At bede er, at man henvender sig til Gud.〔祈るとは神に心を向けることである。〕 同格である場合　例：den Last, at han drikker.〔彼が飲酒するという悪徳〕 前置詞とともに　例：Din Feil bestaaer i, at Du ikke har seet Dig for.〔過ちは、君が油断していた点にある。〕

注1.　目的格であれば、atは省略することができる。
例：Jeg veed, han kommer.〔私は、彼が来るのを知っている。〕 Jeg troede, han var her.〔私は、彼がここにいることを知っている。〕 Han ønsker, han var vel hjemme.〔彼は、自分が快適に家で過ごすことを願っ

68 【22】「疑問の主文でのmonに対応する」
69 【22】「talte」と変更された。

ている。〕 Jeg frygtede, Du aldrig vilde komme tilbage.〔私は、君が二度と戻って来られないと恐れていた。〕

注2. atの前の前置詞forは、意図を表す文（Hensigtssætning）を示す。
例：Han læser, for at han kan lære Noget.〔何かを学ぶために、彼は読んだ。〕 atの前の副詞saaは、結果を表す文（Følgesætning）を示す。
例：Han læser flittig, saa at han lærer Meget.〔彼は勤勉に学んだ、その結果、多くを学んだ。〕

§５５．他の接続文は以下の通り：

a）時間（temporal / Tidssætning）は、da、naar、efterat、førend（før）、inden、den Gang、medens（mens）、indtilで始まる文。

b）因果（causal / Aarsagssætnig）： da、fordi、efterdi、eftersom、saasom、sidenで始まる文。

c）条件（conditional / Betingelsessætninger）： dersom、hvis、saafremt、ifald、omで始まる文。

d）認容（concessiv / Indrømmelsessætning）： skjønt、endskjønt、omendskjødt、om （end、endog）、uagtet、hvorvelで始まる文。

e）比較（comparativ / Sammenligningssætning）： end、som、ligesom、jo（後続するjo、desto、desとともに）で始まる文。

注1. さまざまな単語が、時の接続詞としても（強勢のある）副詞としても用いられる。 例：da, dengang, før, siden jeg kom〔私が来たとき／来たその機会に／来る前に／来て以来〕 これに対して：da, dengang, før, siden kom jeg.〔そのとき／その機会に／以前に／その後、私は来た。〕

注2. 時、原因、認容の接続詞と、時間、因果、認容の意味をもつ副詞を混同してはならない。 例：imidlertid、dernæst、derpaa、thi、altsaa、følgelig、derfor、dog、vel、rigtignokなど。

注3. 時、原因、条件、認容の文が、主文の前にある場合、前文（Forsætning）、主文を後文（Eftersætning）と呼ばれる。後文はしばしば副詞saaまたはdaで指示される。 例：Da han havde været der et Aar og følte sig

utilfreds med Behandling, han fik, saa søgte han sin Afsked.〔彼は一年間とどまり、自分の待遇に不満を感じたので、退職を願い出た。〕 Dersom du gjør det, da fortiener Du Straf.〔もし君がそうするならば、処罰を受けることになる。〕

注4. 条件文は接続詞なしで置かれるときがある、その場合、主語は述語の後に置かれる。 例：Gjør Du det, bliver jeg vred.〔君がそうするなら、私は腹を立てるだろう。〕 Vidste jeg det, blev jeg her ikke.〔私がそれを知っていた、ここにとどまっていなかった。〕

注5. 条件文が、何か現実に起こらない、または起こらなかったことであり、思考や想像にすぎないことを示す場合、条件文も主文も、現在時称と過去時称に代えて、過去時称と過去完了時称とされる。 例：Dersom jeg (nu) vidste det, var jeg (vilde jeg være) lykkelig (men jeg veed det ikke og er altsaa derfor ikke lykkelig).〔もし（今）それを知っているなら、私は幸せだろう。（しかし、それを知らず、つまりそれゆえに幸せでない。）〕 Dersom jeg (igaar) havde seet Dig, var jeg (vilde jeg være / skulde jeg være) flygtet (men jeg saae Dig ikke og flygtede altsaa heller ikke).〔もし私が（昨日）君にあっていたとするなら、私は逃げただろう。（しかし、君に会わなかったし、つまりそれゆえ逃げもしなかった。）〕

注6. このように、そのまま過去と過去完了が現在と過去について、以下のように、仮定された、非現実的な、起こりそうもない事柄としての何かを指し示すために用いられる。 a）om end、selv omをともなった認容文において 例：Om jeg end havde seet Dig, var jeg dog ikke løbet bort (men jeg saae Dig ikke).〔私が君に会ったとしても、やはり私は走り去ることはなかっただろう。（しかし、君に会わなかった。）〕 Selv om Du havde Ret, burde Du dog give efter (men du har ikke Ret).〔たとえ君が正しいとしても、やはり君が譲歩すべきだろう。（しかし、君は正しくない。）〕 b）som omをともなった比較の条件文において 例：Han bærer sig ad, som om han var rig (men han var det ikke).〔彼は、裕福であるかのように振舞う。（しかし、彼は裕福でない。）〕 Han bar sig ad, som om han havde været rig (men han var det ikke).〔彼は、裕福であったかの

ように振舞った。（しかし、彼は裕福でなかった。）〕 c）例えば願望といったさまざまな主文において 例：Vidste jeg det bare (men jeg veed det ikke).〔私が知っていればなあ。（しかし、私は知らない。）〕 Havde jeg bare vidst det (men jeg vidste det ikke).〔私が知っていたらなあ。（しかし、私は知らなかった。）〕 また、疑いがややともなった発言をする他の文において 例：Du skulde / burde gaae derhen (men Du gaaer der vel ikke).〔君はそこに行くべきだろうに。（しかし君は恐らく行かない。）〕 Det var bedre at adlyde (men I gjøre det ikke eller neppe).〔従えばいいのに。（しかし君らは従っていないか、もしくはほとんどそうしていない。）〕 Jeg vilde ønske (men det er uvist eller usandsynligt, at det skeer).〔私は願っている。（しかし、それが起きるか不確か、または、ありそうもない。）〕 Jeg skulde næsten troe (men det er dog usikkert).〔私は信じたいぐらいだ。（しかし、それはだが不確かである。）〕 Det turde være sandt. Hvorfor skulde jeg tie ?〔それは真実かもしれない。どうして口をつぐんでいられようか。〕

注7. 比較文で、副詞saaが先行する場合、接続詞somはしばしば省略される。例：Jeg gjør det saa godt (som) jeg kan.〔私ができるだけ、それを上手にする。〕 Saa ofte (som) jeg kommer, gaaer han.〔私が来たのと同じくらい、彼が行く。〕

§５６．主文も副文も接続詞をもちいて並置的に結びつけることができる。それらの接続詞は以下の通り：

a）連結的（copulativ / forbindende）： baade ― og、saavel ― som

b）離接的（disjunctiv / adskillende）： eller、enten ― eller、
hverken ― eller

c）反意的（adversativ / modsættende）： men

構文

§５７．デンマーク語に、活用形は多くないが、その構文はニュアンスがあり、明確で、規則的である。たとえば以下の文のように：

		Jeg		*har*	*ofte*	besøgt ham.
Da		*jeg*	*ofte*	*har*		besøgt ham etc.
	Har	*jeg*	*ofte*			besøgt ham?
Hvor *ofte*		*jeg*		*har*		besøgt ham, er bekjendt.
Ofte	*har*	*jeg*				besøgt ham.

三つの強調した単語［jeg, ofte, har］の異なった位置は、それぞれに文の性質を説明している。

注．これらの語からなる、６番目のありうる構文： *Har ofte jeg* besøgt ham. は、詩文においてのみ使用が可能である。詩文では一般の構文と比べ、たくさんの変化が許容される。

§５８．強勢が置かれている単語は、しばしば文の第一位置に置かれる。
例：Næste Aar vil han reise.〔来年、彼は旅に出たい。〕 Aldrig vil jeg forlade Dig.〔決して、君を見捨てない。〕 Ham har Du kunnet miskjende.〔彼を君は疑っているにちがいない。〕 Manden har idag paa mange Maader givet mig de største Beviser paa sin Uegennyttighed〔その男は今日、いろいろな方法で私に、自分に私心がないことのこの上なく明瞭な証拠を示した。〕という文は、さまざまな強勢がともなって次のような構文となる。 *Idag* har Manden[...] *Mig* har Manden idag[...] *Paa mange Maader* har Manden idag[...] *De største Beviser* har Manden idag[...] *Paa sin Uegennyttighed* har Manden idag[...]

§５９．一般的な構文は次のとおりである： a）主語、b）述語。
例：Drengen læser.〔少年は読む。〕

注1. 副詞thi、接続詞、疑問詞及び関係詞に修飾される語は、それに直接連接する表現と共に、文の始めに置かれる。 例：Da jeg kom etc.〔私が来たとき、…。〕 Hvorfor læser Du ?〔なぜ君は読むのか。〕 Det Hus, som jeg kjøbte.〔私が買った家〕 Det Sted, hvor han staaer.〔彼が起っている場所〕 Den Mand, med hvem jeg gaaer.〔私と一緒に歩く男〕 Den Mand, hvis Hus jeg kjøbte.〔私がその家を買った男〕 Hvor flittig du er, vide alle.〔どれほど君が勤勉か、みな知っている。〕

注2. 複合時称ではまず助動詞、次に本動詞の順である。 例：Han har læst.〔彼が読んでいた。〕 Han vil læse.〔彼は読もうとする。〕

注3. 補語がある場合、それは動詞の後に置かれる。 例：Huset er stort.〔家が大きい。〕 Drengen hedder Karl.〔少年はカールという名である。〕

注4. 助動詞と本動詞の間に、動詞に属する副詞もしくは名詞をともなった前置詞を置くことができる。例：Jeg har længe været ude.〔私は長らく外出していた。〕 Han har i lang Tid været syg.〔彼は長期間、病気であった。〕 Han har ivrig / med megen Kraft stridt for denne Sag.〔彼は熱心に／多大な精力をかけてこの問題のために戦った。〕 しかし、副文では、主語が接続詞の直後に通例置かれ、そのような説明は通常、述語の前に置かれる。例：Da jeg længe havde været ude.〔私が長らく外出していた時／ので〕 Jeg veed, at Du i lang Tid har været syg.〔私は、君が長期間、病気であったことを知っている。〕 受動文では間接目的語がしばしば、助動詞と本動詞の間に置かれる。Bogen blev mig sendt med Posten / sendt mig.〔本は郵便で私に送られた。〕

§６０．しかしながら主語は以下の場合に述語の後に置かれる。複合時称では助動詞の後に置かれる。

a）§５８により強勢が置かれる主語でない単語が先頭に置かれるすべての文において

b）副文の後に続く主文において 例：Hvad han gjør, veed jeg ikke.〔何を彼がするか、私は知らない。〕 Da jeg havde sagt dette, gik jeg.〔これを私が言い終えて、私は去った。〕

c）monをともなわない直接疑問文において　例：Reiser Du？〔君は往くのか。〕 Naar reiser Du？〔いつ君は旅立つのか。〕 Er han reist？〔彼はもう往ってしまったか。〕

d）命令文と願望文、特別な願望表現のともなわない、において　例：Skriv Du Brevet.〔手紙を書きたまえ。〕 Var han blot her.〔彼がここにいたらなあ。〕 しかし、〔gidやbare等の表現が伴う場合、〕Gid han var her.〔彼がここにいたらいいのに〕 Bare han var her.〔彼がここにいたらなあ〕

e）接続詞をともなわない条件文において　例：Vidste jeg det, var jeg glad.〔私がそれを知っていたら、私は嬉しかった［のに］。〕

f）会話表現の中に直接の発言が指し示される文において　例：“men”, sagde, svarede, gjentog han etc.〔「しかし」と彼は言った、答えた、繰り返した、など。〕

g）不定のderの後で　例：Der kom en Mand til mig.〔一人の男が私の方にやって来た。〕

§６１．さらに詳しく説明するために別の表現を付加した表現は、その表現に連接する。個別には以下の規則にしたがう。

A．動詞をさらに詳しく説明するために付加される表現は、動詞の直後に置かれる。すなわち：

a）直接目的語と間接目的語、間接目的語は直接目的語の前に置かれる。
例：Jeg gav ham Bogen.〔私は彼に本を与えた。〕

b）他の説明の名詞は前置詞があってもなくとも　例：Jeg gik 3 Mil.〔私は３マイル歩いた。〕 Han gik med sin Broder.〔私は兄［弟］と歩いた。〕 Han satte over Floden.〔彼は河を渡った。〕

c）副詞　例：Han arbeider godt.〔彼はよく働く。〕

B. 名詞、形容詞、副詞にさらなる説明のために付加される表現は、それらの前に置かれる。すなわち、

a）冠詞と形容詞、また形容詞的代詞と数詞は名詞の前に置かれる。
例：en Dreng〔ある少年〕、min Dreng〔私の少年〕、tre Drenge〔三人の少年〕、god Vin〔良いワイン〕

b）名詞の前の前置詞　例：paa Gaden.　けれども、強調が置かれた名詞は文の最初に置くことできる。その場合、名詞に付属する前置詞は文の末尾に置かれる。　例：Ham søger jeg efter.〔彼を私は探している。〕 Denne Handling fortjener han Straf for.〔この行為で彼は罰を受ける。〕 Hans Opførsel er jeg misfornøiet med.〔彼の振る舞いが私は不快である。〕 同様のことが関係詞somでも起こる。通例、somは前置詞の後に置くことはできない。　例：den Mand, som jeg sørger efter.／（§５０により、省略された関係詞とともに）den Mand, jeg sørger efter.〔私が探していた男〕

c）冠詞、数詞、代詞、副詞は一般に形容詞の前に、代詞は数詞の前に、説明のための副詞は説明される副詞の前に置かれる。　例：den gode Dreng.〔良い少年〕 tre gode Drenge.〔三人の良い少年〕 mange flittige Drenge.〔多くの勤勉な少年〕　mine flittige Børn.〔私の勤勉な子ども〕 disse flittige Børn.〔これらの勤勉な子ども〕 en meget god Mand.〔とても良い男〕 disse tre Børn.〔これら三人の子ども〕 hver tredivte Mand.〔30人に一人の男〕 meget godt.〔たいへん良く〕

注. 副詞altforとsaaをもちいる場合　不定冠詞は形容詞の後に置かれる。例：saa svag en Mand / en saa svag Mand.〔余りに弱い男〕 疑問詞・関係詞のhvorを用いる場合も不定冠詞は形容詞の後に置かれる[70]。単語hver〔各々〕、saadan〔そのような〕、slig〔このような〕は不定冠詞の前に置くことが可能で、mangen[71]〔たくさんの〕、hvordan〔どのような〕、hvilken〔どの〕は不定冠詞の前に置かなければならない。

d）前置詞なしで形容詞もしくは副詞を説明する名詞は、その前に置かれる。例：to Alen lang.〔２アレン長い〕 en Time før.〔１時間前〕 en mig vigitig Sag.〔私にとって重要な事柄〕 Han taler sin Broder ligt.〔彼は自分の兄／弟と同じように語った。〕

注. 前置詞をともなって形容詞もしくは分詞を説明する名詞は、その後に置かれる。例：begjærlig efter Ære.〔栄誉に貪欲な〕 higende efter Ros.〔賞賛を熱望している〕 それにもかかわらず、さらに別の説明、例えば、

70 【22】「例：Hvor god en Mand er han ikke ?〔彼は何とよい男ではないか。〕」
71 mangeとは別の形容詞、mangen en blomst, mangt et brev のように。

冠詞、代詞、数詞もしくは属格が先行するならば、前置詞をともなった名詞も先行する。例：en efter Ære begjærlig Mand.〔名誉に貪欲な男〕 det til Kongen sendte Brev.〔王に送られた手紙〕 hans af Begjærlighed forblindede Sind.〔貪欲さに目がくらんだ彼の心〕 disse for ham vigtige Anliggender.〔彼にとって重要なこれらの関心事〕 tvende ved Skjønhed udmærkede Taler.〔美しさが際立った2つの話〕

e）属格はそれが説明する名詞の前に置かれる。 例：Kongens Slot.〔王の城〕

§６２．たいていの副文は、主文の前にも後にも置くことができる。その場合、強勢が置かれている。 例：At Du har gjort det, veed jeg. もしくは Jeg veed, at Du har gjort det.〔君がそうしたことを私は知っている。〕 Hvor ofte Du har været der, veed jeg ikke. もしくは Jeg veed ikke, hvor ofte Du har været der.〔何回そこに君がいたか、私は知らない。〕 Hvis jeg kan, skal jeg komme. もしくは Jeg skal komme, hvis jeg kan.〔もしできれば、私は来よう。〕

【付録】不規則動詞変化表[72]

不定形	現在	過去	完了・過去分詞
bede	beder	bad	har bedet
befale	befaler	befoel	har befalet
		befalede	
bide	bider	beed	har bidt
blive	bliver	blev	er bleven
bringe	bringer	bragte	har bragt
bryde	bryder	brød	har brudt / bruden, brudne
byde	byder	bød	har buddet / buden, budne

72 本書では、いわゆる不規則動詞の変化表が添えられていないので、Badenの文法による一覧を付録とする（Jacob Baden. *Forelæsninger over det danske Sprog, eller resonneret dansk Grammatik*. Kiøbenhavn, Tredie paa nye giennemseete og forbedrede Oplag, 1804, s. 121-124）ただしこの変化表には不定形があげられていない（動詞の代表形が直説法・現在・一人称・単数とされるため）ので、不定形を補い、væreの変化を移動するなどの改変を加えている。また、正書法に若干の相違がある。

burde	bør	burde	har burdet
			har burdt
drage	drager	drog	har draget / dragen, dragne
døe	døer	døde	er død
faae	faaer	fik	faaet
(古形 fange)			過去分詞 fangen, 複数 fangne
falde	falder	faldt	har falden, er falden
	(複数古形 fulde)		/ falden, fulden
fare	farer	foer	har faret, er faren / faren
flyde	flyder	flød	har flødt , er fløden / fløden
flyve	flyver	fløi	har fløiet, er fløien / fløien
fortryde	fortryder	fortrød	har fortrydt, -- fortrudt
gaae	gaaer	gik,	har gaaet, er gaaen, 複数 gaa'ne
		複数古形 ging	過分古形 gangen, 複数 gangne
gale	galer	goel, galede	har galet
gide	gider	gad	har gidet
gielde	gielder	gialt	har gieldet
giøre	giør	gjorde	har gjort
gnave	gnaver	gnov, gnavede	har gnavet / gnavet, gnavede
gnide	gnider	gneed	har gnidt / gneden, gnedne
grave	graver	grov	har gravet / gravet, gravedet,
			graven, gravne
græde	græder	græd	grædt
have	haver, har	havde	har havt
hedde	hedder	hed	har heddet, hedt
holde	holder	holdt	har holdet
hugge	hugger	hug, huggede	har hugget / hugget, huggne,
			huggen, huggne
hænge (intr.)	hænger	hang	har hængt

jage	jager	jog	har jaget / jaget, jagede, jagen, jagne
kunne	kan	kunde	har kunnet
klinge	klinger	klang, klingede	har klinget
klyve	kløv	har kløvet	
knække (intr.)	knækker	knak	-----
komme	kommer	kom	er kommen, komne
kyse	kyser	køs	har kyset
lade	lader	lod	har ladet
lee	leer	loe	har leet
lide	lider	leed	har lidt
ligge	ligger	laae	har ligget
løbe	løber	løb	har løbet, er løbne / løben, løbne
lyde	lyder	lød	har lydt
lyve	lyve	løi	har løiet
lægge	lægger	lagde	har lagt
maatte	maa	maatte	har maattet
nyde	nyder	nød	har nydt
nyse	nyser	nøs, nyste	har nøset, nyst
ride	rider	reed	har ridt, er reden / reden, redne
see	seer	saae	har seet
sidde	sidder	sad	har siddet
skulle	skal	skulde	har skullet
skee	skeer	skede	er skeet
skiælve	skiælver	skialv, skiælede	har skiælvet
skride	skrider	skreed	har skridt, er skreden / skreden, skredne
skryde	skryder	skrød	har skrudt
slaae	slaaer	slog	har slaaet, slaget / slagen, slagne

slide	slider	sleed	har slidt
smide	smider	smeed	har smidt
snyde	snyder	snød	har snydt
sove	sover	sov	har sovet / soven, sovne
staae	staaer	stod	har staaet, staaen / staaen, staa'ne 古形 standen, standne
stride	strider	streed	har stridt
sværge	sværger	svor	har svoret / svoren, svorne
svie	svier	sveed, sviede	har svedet, sviet / sveden, svedne
sætte	sætter	satte	har sat
tage	tager	tog	har taget / tagen, tagne
tie	tier	taug, tiede	har taugt, tiet
træde	træder	traadte	har trædt, traadt / traaden
trine	triner	treen, trinede	har trinet
trives	trives	treves	har trivets
turde	tør	torde	har tordet, tordt
vide	ved	vidste	har vidst
ville	vil	vilde	har villet
vore	vorer	vorte	har voret, voren / voren, vorne
være	er	var	har været（古形 vaaren）
æde	æder	aad	har ædt